
異世界を渡るヒトの物語

オーキス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界を渡るヒトの物語

【Nコード】

N7230R

【作者名】

オーキス

【あらすじ】

日本のとある山奥にある地下研究所では、石油などに代わる次世代型新エネルギーの実験が行われていた。

その中で、暴走したときのためのストッパーとして研究主任の幼馴染で悪友であった殺し屋『皇木駆真』は、暴走という実験事故に巻き込まれてしまい……………

基本、三日から一週間の間で一つ更新しようかと思ってます。

調子が良いときは続けて更新できるかもしれないですが。

あと、テレビ化したやつをネタにすることもあったりなかったり。

最近思ったこと……豊口めぐみさんが声優担当するキャラのどれもが、作者の好みに当て嵌まるとかすごいな。

ブログ〜それは終わりと始まり〜（前書き）

注意

これは『渡る世界は危険ばかり』の書き直しです。
飛ばしたい方は次へお進み下さい。

ブローグそれは終わりと始まり

やあ、俺さんは『すめらぎかるま皇木駆真』。

フリーの殺し屋さ

今俺さんは、幼馴染兼腐れ縁兼研究者兼主任の実験の為に蝶頑丈な広いテストルームで待機しているところだよ。

何でも次世代型の新エネルギーを作り出す実験で、暴走した場合の為に待機しておけとお願ひされてしまったのさ。

まあ、実際はその悪友の好物であるチョコレートを俺さんが勝手に食べてしまったから仕方なくしてるんだけどね。

ハハッ

『一体誰に説明している？』

「いや、何故かこれを言わなければならないという電波が……。」

『……お前、何処かで頭でも打ったか？』

「いや、俺が頭打ったりしたら、そのぶつけた物が凹んだり壊れたりすると思うんだが。」

『それもそうだったな。』

お前は人間の力カテゴリではあるが、実際はヒトの形をした何かだもんな。』

「それは酷い。」

『……………駆真。』

いい加減真面目モードで待機しておけ。』

おっと。

あまりにキャラがウザかったようで注意されてしまった。

そうそう、ついでだから紹介しておくよ。

今し方スピーカーから聞こえてきた声の主は『おきたゆつき沖田悠輝』。

ここ次世代型新エネルギー開発研究所の主任で、さっきも言ったと

おり俺さんの悪友の一人だ。

ちなみに、性別は女で、かなり美人、あと巨乳。

全国の薄い胸の人が見たら血涙を流してしまうね、間違いなく。

最近、こいつと一緒に居る事が多いから、他の男性職員に殺気の籠もった視線が多いから困っちゃうよ、全く。

『ではこれより、次世代型エネルギー物質『レガリア』の生成実験を行います。』

つと、そんなことを考えてるうちにもう直ぐ始まるみたいだな。

なんでも、この『レガリア』ってエネルギーの生成が成功したら核なんて目じゃないくらいいの、クリーンで莫大なエネルギーを生み出すことが可能とのこと。

まあ、そんなこと俺さんにやあどうでも良いんだけどね。

さっさとこの実験が終了して金貰えたらいいだけの話だし。

ああそういえば。

この研究所だけど、今行っている新エネルギーの開発以外にも武器の開発なんかもやってるせいか、日本のとある山奥に建てられていて、地下研究所としてあるんだよね。

で、その武器を俺さんに時々テストさせたりしているって言う。

しかも『ちゃんとした』実用的な武器を何個か譲ってくれたりもしたな。

なんで『ちゃんとした』を強調するかって言うと、理由は単純。

浪漫武器も作ったりしてしまっただよ。

ちなみに、ここの研究員、というより俺を含めた全員がオタクだったりする。

『エネルギーフィールド形成。

レガリア、精製開始。』

つと、そうこうしている内に実験が始まったな。

現在俺が立っている場所は半径100mの一半球形（ドーム型）のテストルーム。

壁の所々にカメラがついていて、部屋の中にはレガリアを精製するための装置が設置されてある。

その装置から伸びた四本の突起物の先から光の粒子みたいなのが勢いよく吹き出っていて、その粒子の先で球形のエネルギー体が少しずつ形成されていた。

『目標指数まで後68、67、66……』

研究職員の一人のカウントと共に少しずつ大きくなっていく光の球体。

その真白い球体が徐々に大きくなっていく度に、球体の周りにスパークらしきものが走っている。

『完了まであと22、21、20、19……』

ついに20%をきったか。

……うん？気のせいかな、中心部付近に黒い点が見えるような……。

「悠輝。」

『なんだ？』

チユコの件ならこの実験が終わるまで許さんぞ？』

「それは勘弁……じゃ無くてだな。」

レガリア、だっ たっ けか？

あれの中心部付近に黒い点が見えるんだが。」

『……………何？』

告げてみると、壁の一部がスライドして中から壁に設置されてるカメラよりも二回りも大きい大型カメラがせり出てきた。

黒い点は徐々に大きくなっている。

と、黒い点が1cmぐらいまで大きくなったかと思うと、一気に白い部分を侵食してあつという間にレガリアが黒い球体となってしまう。

モニタールームからは動揺の声が聞こえてくる。

「おい、駆真!!」

「なんだ？」

「あれを止める!!」

「了解！」

それだけで会話は終了。

装備は万端、やることは一つ。

「それじゃ、皇木駆真……………」

思考の切り替えを行い、今からは仕事モード。

右手にレイジング・ブルカスタム、左手に超硬度ナイフを構え、一番初速の速くなる体勢をとる。

対象の装甲の薄い部分などのデータは既に覚えているため、問題ない。

あとは行動に移すだけ。

「目標を破壊する!!」

宣言と同時に足に溜めた力を弾けさせて一直線に黒く染まったレガリアに接近する。

その勢いを利用してナイフを逆手に持って装置の中心に突きつけた。

が、予想外にもナイフは切っ先が少し刺さっただけで、それ以上は進めることが出来ない。

「なんでこんなのにいい装甲させてんだよ!!」

『仕方ないだろう!? 出力を上げるためには装甲を頑丈にしなければならなかったんだからな!!』

「ええい、ならば!!」

突き刺した超硬度ナイフを収納し、腰の後に差してある小刀ほどの大きさのある超振動ナイフを抜き放ち、傷ついた中心部分に突き刺してみた。

すると、効果があつたようで、突き刺した部分の周りから粒子化して崩れ落ちる。

効果があると分かると、そこから円形状に切り取り、中に仕舞われている本体の中枢にレイジング・ブルにリロードしている銃弾を全弾打ち込み、さらに超振動ナイフで切り刻み、完全に装置を破壊した。

しかし、黒く染まったレガリアは消えることなくその場に留まり、さらに肥大化し始めていた。

「おい、これはどういうことだ?」

『私にも分からん!!』

そんなことよりその場から早く離れる!!

何が起こるかわからんぞ!!』

「了解!」

返事を返し、武器を仕舞ってすぐさま離れようとするが、そこで問題が発生した。

離れようとするが、徐々にレガリアに引き込まれ始めているのだ。

「くそつ、なんてこつたい!!」

まだまだ見たい物やら何やら、積みげーだとかがたんまりと残ってるというのに!!

まだPSP2∞のアイテムとか全部集め切ったりしてないんだぞ!?しかし、暴走した黒レガリアにそんなことが関係あるはずもなく、初めより2、3回り大きくなったレガリアから、突如として触手が伸びてきた。

勿論、少しでも引き込まれまいと踏ん張っていた俺が回避できる筈もなく、簡単に触手に捕まり、空中にぶら下げられてしまった。

「ええい、H A N A S E E!!」

叫びながらもがいて脱出を試みるが、触手はそれをものともせずに加自分の本体たるレガリアに引きずり込んでいく。

悠輝がマイク越しに何かを叫んでパネルを操作しているのだろうが、もう首から上と突き出した右腕しか外に出ていない俺にはどうする事も出来なかった。

(Shit!!)

碌な死に方しないとは思ってはいたが、せめてT国とかKT鮮とか滅ぼしてから死にたかった!!)

存外恐ろしいことを考えている俺だが、せめて俺が存在した証の為にもと思い、右手の人差し指に着けていた指輪を外して出来るだけ遠くに放る。

その瞬間、残っていた顔と腕も完全にレガリアに飲み込まれてしまい、完全にその場から駆真の姿が消えてしまった。

駆真が完全に飲み込まれると、レガリアはまるで自らの役目は終わったと言わんばかりに収縮し、最後にはその場から完全に消え去っ

たのだった。

「レ、レガリアの反応……消失……しました。」

「皇木駆真の生体反応も……飲み込まれてからは、ありません……。」

「そんな……嘘……だろ？」

オペレーターからの報告を聞き、悠輝は崩れるように床に座り込んでしまった。

だが、無常にも皇木駆真はこの世界から既に消失してしまっている。

「また、私を驚かそうと何処かに隠れてるんだろ……？」

今ならまだ許してあげるから、今までのことも水に流すから、出てこいよ……。」

信じられないと、そう思い、もう居ない駆真に呼びかける悠輝。

「出てきてくれよ……。」

お願いだから出てきてよ……！！

お願いだから、駆真ああああ……！！」

彼女の慟哭は空しく響き、一番聞えてほしい筈の駆真には届かず、後には彼女の鳴き声と職員の沈黙しか残らなかったのであった。

キャラ設定〜一回目〜

名前：皇木 駆真 すめらぎかるま

年齢：21歳

性別：男

種族：元ヒト

持ち物、武器……

超硬度ナイフ×1new

超振動ナイフ×1new

ワイヤーナイフ×2new

レイジング・ブルカスタムnew

ベレッタM93Rカスタムnew

各種弾薬new

強化ワイヤー200mnew

ライター

ライター用オイル

携帯食料1週間分new

金（10万6千円）

タバコ3パック

携帯

自己発電充電器

簡易サバイバルパックnew

簡易医療用キットnew

容量の大きいバックパック

new紹介

超硬度ナイフ

錆びず欠けず折れず切れ味落ちずの凄いナイフ。

研究所で開発された物の一つ。

駆真がとあるライトノベルを読んで「このナイフ版が欲しい。」と頼んだ所、三日で作られた代物。

5年くらい使い続けているが、現在進行形で現役である。

以降Sナイフとする。

超振動ナイフ

ギミックが組み込まれた刃渡り20cm程のナイフ。

ギミックを起動させると刃部が高速振動し、中てた物質を粒子状に崩すことが出来る。

変態研究員たちに頼むと一週間で作ってしまった。

元ネタは『9S^{ナインエス}』から。

以降、Vナイフとする。

ワイヤーナイフ

刃を射出することが出来るギミックナイフ。勿論、研究所作。

グリップの内部にギミックが組み込まれており、最大射程50mまで伸ばすことが出来る。

勿論巻き戻すことも可能。

刃はSナイフと同じ物が使われており、ワイヤーも高硬度ワイヤー（研究所作）が使われている。

以降、Wナイフとする。

レイジング・ブルカスタム

威力が既存の物より2倍にアップし、反動が抑えられたレイジング・ブル。

見た目はそのままだが、グリップに狼の頭部が刻まれている。

ベレッタM93Rカスタム

威力はそのままに、連射速度と装弾数がアップしたベレッタM93

R。

グリップに一角獣^{ユニコーン}の頭部が刻まれている。

携帯食料

研究所で開発された携帯食料。

形は粒状だが、水と一緒に飲むと瞬く間に空腹が満たされる。

味は様々あり、今駆真が持っている分はチョコ、バニラ、イチゴ、オレンジ、フルーツ、クリームシチュー、カレー、の七種類である。

簡易サバイバルパック

バックパックの中に入っている簡易パックの一つ。

緊急時や遭難時に役に立つ道具が数種類入っている。

中身は、針と糸、安ピン数個、小型コンパス、サバイバルマッチ、メスの刃数枚、塩の錠剤数個、笛、マグネシウム錠剤数個、等等。任務時以外でも普段からカバンの中の隅の方に入れられている。

簡易医療用キット

緊急時に使用する用の医療用キット。

主に消毒、縫合、止血、簡単な毒抜き位しか出来ない。

これも普段からカバンの隅に入っている。

人物詳細

裏世界的に有名な殺し屋。

依頼請負企業連合「ギルド」のトップランカーで、称号「永劫」と『魔王』を持つ殺し屋だったが、幼馴染の所属する研究所の実験事故で『レガリア』に飲み込まれてしまい、この世界から去ることになってしまった。

しかし、駆真自身もただ飲み込まれたわけではなく、飲み込まれる間に自分の生きた証として一つの指輪を残している。

指輪は事故の後、沖田悠輝が生涯肌身離さず持っている。

身体能力や何やらが人間の域を軽く超えており、簡単に言うならば『史上最強の弟子ケンイチ』に出て来る風林寺隼人がこれになったような感じ。

一人称は「俺さん」もしくは「俺」。

決め台詞は「仕方ないさ、俺さんが相手だったんだから。」

口癖は「Shit!」「仕方ねえな。」「面倒だ……。」「マジでか。」などなど。

容姿はブレイブルーのハザマを思い出してくれたらいい。

あれのスーツが白になって髪が紅になったものだ。

仕事時には顔の上半分か、顔全体を隠す仮面をつけており、コードネームは「メビウス1」

プライベートでは重度のオタクであるが、普段は普通にしてある為ばれていない。

が、研究所では自分全開でいた。

最近はPSP2のアイテムコンプや、MH3rdのアイテム、装備コンプに勤しんでいたが、件の実験事故で叶わぬ夢となってしまうった。

実は悠輝に好意を抱かれていたことを知っていたが、あえて気づかない振りをしていた。

理由としてはまだ幼馴染として、悪友としての関係を続けていたかったから。

なお、チェリーは14歳の時になくしている。

名も無き異世界 1話(前書き)

作「バイトが忙しくて更新しづらいDEATH。」

駆「儲かるから良いじゃないか。」

作「でも疲れるから嫌でゲソ。」

名も無き異世界 1話

レガリアに飲み込まれてから幾らの時間が流れたのだろうか。いや、そもそもこの空間に時間という概念はあるというのか。

（あー、くそ。

俺さんとしたことが、こんなことになるなんて……。）

あの時、レガリアに飲み込まれた後、俺さんはすぐさま自分がどうなったか、この空間は何なのかを確認してみた。

それで分かったことといえば、

- ・俺さんは死んだというわけではないみたいである。
- ・この空間は絶えず動いており、俺さん自身も流されている。
- ・この空間では自らの体の構築が出来ない。
- ・体は構築できないが、あらゆる事が出来る。ただし、物や生物を創造するなどの類は出来ない。
- ・俺さんの体は、今は実体は無いけど、意識の塊として存在している。
- ・どうやら俺さんはこの空間に作り変えられてしまったようだ。
- ・この空間に意思は存在しないが、俺さんに干渉、同化してくるものは多数存在している。
- ・神など存在しなかった。

といった具合である。

他にも色々あるだろうが、それは今は良いとしよう。

俺さんがこの空間に作り変えられたというのは、簡単に言えば不老不死となったと言える分かるか。

ただ不老不死ではあるが、肉体を自由自在に変化させることが出来るみたいだ。

あと、この空間じゃあ面倒だから、これからは『ルート』と呼ぶことにする。

と、こうしている間にも俺さんに干渉してきて同化したものが色々ある。

それだけじゃなく、俺さん自身もこの『ルート』内で出来る事を色々とやってみた。

結果的にはこの空間でナニガアツテナニカヲサレテナニカヲシタ。そんな俺さんが『ルート』の中を漂いに漂った結果。光を放つ出口を見つけた。

時間という概念が無いためどの位経ったかは分からないが、元の世界の時間で表すなら百年は軽く越えてると思う。

（あ……………長かった。

実に長かった。

多分きつと百年くらい流されたんだろうけど、どんな世界でもいい。とにかく人のいる世界に行けますように！！

あ、でもイレギュラーだけはマジ勘弁。）

そう思ったのも束の間。

次の瞬間には光の先にへと放り出されていた。

ドサッ

「アウチッ。」

放り出された先は緑の広がる森で、その証拠に見渡す限り木しか存在していない。

「どこだ、ここ？」

荷物の確認をしてみると、バックパックの中身も元から装備していた物も全て揃っていた。

その事に安心した俺さんはポケットからタバコを一本取り出し、火をつけて口に咥えた。

「うん、まあ、テキトーに歩くとしますか。」

誰に言うわけでもなく呟き、俺さんはナイフを片手に森の中を歩き出したのだった。

歩き始めて数十分。

当ても無く歩いていくと、嬉しい事に森を抜けることが出来て、一本道の続く平原っぱいところに出てきた。

ただ、その一本道は舗装されておらず、地面がむき出しの地面であったが。

その道を歩いていくこと数分。

少し高い背の草むらから、突然男達が飛び出してきた。

文字通り飛び出して、だ。

しかも各々の手には剣や斧といった刃物が握られている。

それに見てみるとそいつらの恰好は、中世以前くらいに居そうな、いかにも盗賊ですと言ったような簡易的な服装だった。

顔つきも野盗だといわんばかりに悪人面ばかりである。

すると、そいつらを観察していると男達の中から、他の奴よりも少

し身なりのいい男が前に出てきた。
おそろくこいつがリーダーだろう。

と、前に出てくるや否や盗賊リーダーが何かを言い始めた。

おそらく、俺に身包み全てここに置いて行け！！だとかなんとか言ってるんだろうけど、残念なことに全く持つて言葉を理解できないので、俺は『ルート』の中で手に入れた力を試すことにした。

方法は簡単、ついでだから実演して見せようか。

前に出てきた奴の頭を掴んで、頭と体を離婚（切断）させて、『アクトサークル』（以降はACと表記する）の《サーチ検索》、《ドレイン吸収》、インストール《インストール定着》の三つを発動するだけ。
ね？簡単でしょ？（ゆっくり風）

「「「「「お、お頭ー！ー！！」「」「」

こいつの中から国のことや常識、言語に対する知識なんかを奪ってから聴いた言葉がこれだった。

「お前らうつさいぜ。」

ぽいつ、とお頭の頭をそこらに放り投げ、Wナイフを二本とも手にして構える。

「お頭の敵討ちだ！！」

「「「「「おおおお！！」「」「」

構えると同時、盗賊達が襲い掛かってきた。

「面倒な……。」「

仕方が無いので呟きを一つ落として襲い来る盗賊たちに対処するこ

とした。

十分後。

その場には駆真以外の人は生きていなかった。

片付けた方法としては、ナイフを片方射出して心臓を撃つ、その間に近寄ってきたやつらをもう片方のナイフで切って近づけないようにし、巻き戻ってきたところでもう一回同じことを繰り返す、といった所だ。

頭部を狙わないのは、こいつらから知識を奪る為である。

ついでに金目の物も持っていたら頂きだ。

「……………成る程ね。

大体は把握した。」

その場にいた十数人の盗賊達から知識と金目の物をとるだけ取り、その辺に投げ捨てた俺は、一旦辺りを見回してみる。

……………うん、物の見事に死体が散乱しているな。

まあ、そんなことはどうでもいいとしてだ。

おかげで、だいたいの文字や国といった知識が手に入った。

これでこの世界に関しては困ることはあまり無いだろう。

「盗るもんも盗ったし、この国の首都に行くとしますかね。」

Wナイフの血を拭って鞘に収め、数回屈伸すると、俺はここからこの国『月光の国』の首都『アマキリ』を目指して歩き始めたのだった。

名も無き異世界 2話（前書き）

まだオリジナル魔法世界です。

名も無き異世界 2話

あれから二日が過ぎ、目指していたこの国の首都『アマキリ』に着いた。

その二日の間、まず殺した盗賊達の隠れ家から金品を根こそぎ奪い、捕まっていた女達を解放し、一日目はそこで寝た。

二日目は、大きさが2mほどの猪を狩って晩飯にしたり、地面を群れで走る黄色い鳥類を見かけたりと、色々ありながらも首都を目指した。

そんなこんながあつてたどり着いた首都だが、見た目が壁に囲まれた中世ヨーロッパの大きな町というのが第一印象だった。

そんな町に普通に門から入っていくと、正面には活気のある市場が展開されていた。

入るときにとったガイドマップによると、この町にはそれぞれ工業地区、居住地区、商業地区、学業地区の四つに別れていて、その全ての地区の通りの先にこの首都のシンボルとなっている城が建っているとの事。

通りはなだらかな坂道となっている為、籠城戦の際は敵国としたら攻めづらいだろう造りともなっている。

また年に一度、この国の美男美女を決めるコンテスト『ムーンライト・コンテスト』、通称『月コン』が行われ、その年のミスター、ミス月コンチャンピオンを決めるらしく、その大会が始まる二週間前から準備が始まり、店も外部からの客で特に賑わい始めるらしい。しかし、残念なことに今の時期に月コンは行われないようだった。

一通りガイドマップを読み終えた俺は、一先ず商業地区から少し離れた位置にある宿屋に部屋を一週間分取ってから市場を見回ることにした。

ただ、荷物という荷物は特に無いため、鍵をとっておいただけであ

るが。

それはともかく、市場を見ていると様々な物が売られていた。牛肉や豚肉といった普通の肉類を初め、少し大きさが違う位の、もとの世界で売っているのとはば変わらない食材。

他にも、スライムゼリーやらドラゴンの肉といった元の世界には無い食材や、指輪、チョーカーといったアクセサリー類。

鉄の剣や鎧といった、元の世界ではほとんど使われることの無い武装。

蚊の心臓や蛙の目玉といった、用途の分からない物までもが売られていた。

それを出店者たちは、客寄せの為に威勢良く声を上げて少しでも売ろうと努力する。

元の世界には中々無い賑わいを見せていた。

「うん、すつごい人だからだなあ、おい。

まさに『人がゴミのようだ』と言える。」

露店でいくつか買った、ホットドッグに似たものを食いながら歩きつつ、呟く。

今歩いている場所は商業地区と学業地区の境辺り。

俺は、この首都にある大図書館を目指して歩いていた。

「とりあえず、簡単に終われば一番助かるんだよね……。」

と、言っている間に目的の大図書館に到着。

手に持っていたホットドッグを手早く腹に収め、早速中に入ることにした。

何故ここに来たのかというと、答えは簡単。

この世界に広がる『魔法』とやらを自らのものにしようと思ったからだ。

とうのも、この街に来る際に殺した盗賊の中の何人かに魔力持ちが数人おり、その時に吸収した数人に魔力があつてそれも吸収。ついでだからこの大図書館で魔法を使えるようにしちやおうぜつてなつたのである。

「成る程ねえ……。

魔法を強くするにはまずイメージを強く持ち、そのイメージを呪文を唱えて発動させる……つて事か。」

そんな俺さんが読んでいるのは初心者用の魔法の使い方が乗った本だ。

初心者用とあつて分かりやすいようにと図が描かれていたり、文字を見やすくされたりしていた。

ただ、それをパラパラ……と流し読みで読んでいるが。

実はこの間、腕に《分析》^{アナライズ}、《検索》、《吸収》、《定着》を四重展開して目に入つた情報を全て読み取り、その中から必要だと思ふ知識のみを吸収していた。

その状態で流し読みしていると、1cm位の太さの本が約十秒、広辞苑や六法全書並の太さの魔道書でも十分程で読み切つていた。結果、この世界の在り方、国、種族、この世界に存在する魔法の種類など、知りたいことが約二時間ほどで終わってしまった。

「ふむ……。

予想よりも早くに終わらせてしまったな。

じゃあ………閲覧禁止の禁書コーナーにでも行きますか。」

読み終わった本を全て元の場所に戻し、誰からも見えない死角となつてゐる場所を探し、そこに一度隠れる。

そこに隠れた俺は、《隠密》^{ステルス}を展開。

するとACの円環が全身を通し、俺の姿を透明にした。

それだけじゃなく、足音、体温、匂いなど、バレる要素となるものは全て消してくれるという優れた能力だ。
その状態で館内を歩き、本を探しているときに見つけた隠し階段に入っていく。

隠し階段は地下へと続いており、十数秒ほど階段を下りたところで地上のフロアよりは狭いが、それでも普通よりも広々とした部屋に出てきた。

その部屋は壁一面に本が敷き詰められており、どれもこれもがかなりの力をもつ魔道書だということが理解できる。

また、本の中には特殊な術式が施された透明のガラスケースに封じ込められた物まであった。

「へえ……、これは凄いな。」

地上階にあるもの以上にいいものがある。」

嬉々としながら近くの本に手をかけてACを展開しながら読み込んでいく。

呪いが掛けられている物も《浄化》デイスベルを発動して無効化しながら脳内に取り込んでいった。

それを行うこと数時間。

駆真は、五百冊以上あった六法全書並の太さのある魔道書を全て読み込んでしまった。

勿論、特殊ガラスケースの中に封じられた物も、だ。

それを終えた駆真は、また隠密を展開して地上に戻り、宿屋に帰っていた。

「うん、中々いい収穫だったな。」

あとは、城の最深部にある秘宝の情報取得と書庫内の本の知識取得、それとこの世界のギルドで金稼ぎさせてもらう位か。

ああそれと、銃弾の作成と新しい武器を作っておかなきゃ、だな。」

宿屋の食堂で出された夕食を食べながら今後の計画について纏めていく。

考え付いた事柄は全てメモ帳に書きとめ、忘れないように保存。

ちなみに、このときの文字は当然日本語で書いており、誰かに見られたとしても解られないようにしている。

夕飯を食べ終えた駆真は、食器の乗った盆を食堂のカウンターに返却して自室に戻った。

部屋に戻ってくると、少し休憩した後、銃のメンテナンスと弾の残数の確認、各種ナイフの手入れをしてから、部屋に備え付けられたシャワーを浴びてその日は寝たのであった。

名も無き異世界 3話（前書き）

まだ続きます。

名も無き異世界 3話

翌日。

二日間野宿していたからか、ぐっすりと眠れた駆真は、朝飯をガッツリ食べた後に『ギルド』に向っていた。

元の世界の『ギルド』は裏専門の企業だったが、この世界のギルドはどうやら表裏関係なく依頼を扱っているらしく、ランク制度も元の世界のと似たような物だったので割とすんなり理解できた。

しかも、規約は唯一つ。

『もし依頼遂行中に死んだとしても責任は取らないよ』の一つだけである。

まあ、そんなことはどうでもいいといった感じで流しながらも駆真は記入事項に必要なことを書いていく。

その間に少し説明しておこう。

『ギルド』とは依頼請負業社のことで、依頼人に依頼とその手数料と報酬を貰い、それをギルドに登録しているランカーに仲介する業者のことだ。

ギルドにはランク制度が組まれており、ランクは下からE↓D↓C↓B↓A↓S↓SS↓X↓Zの順に高くなっており、ランクを上げるには一つのランクにつき15個のクエストをクリアするか一つ上のクエストを10個クリアし、尚且つ昇級クエストと呼ばれる試験をクリアしなければならない。

しかし、上に上がるに連れ難易度も高くなり死亡率も跳ね上がる為、必然的に上級者達は数が少ないのが現状である。

Zランクのクエストは普段は発生せず、それこそ天災クラスのモノが来ない限りは発生する事はない。

また、裏の依頼は最低でもSランク以上に上がらないと受けられないらしく、しかも表の受付では受けられなくなっており、受けるには

特別な合言葉を言わないといけないらしい。

と、説明をしている間に記入要項に記入し終えた駆真は受付に用紙を提出。

数秒後には一枚の白いカードが渡された。

カードには皇木駆真のフルネームと、年齢、性別、登録日が書かれていた。

これはギルドランカーとしての証明書となっており、簡単な身分証明書として、自分の金庫のカードとして使えるという代物である。カードの色は初めは白だが、ランクが上がるにつれ色が変わり、最終的には黒になるとのことだ。

「さて、早速依頼でも受けますかね……。」

と呟き、クエストボードをみて直ぐにDランクに上げれそうな依頼が無いかを探す。

慎重に吟味し、手頃そうな十枚の依頼用紙を手にとって受付で受領確認してもらった駆真は、すぐさま依頼を達成するために現場に向った。

だがしかし……………

「か、簡単すぎる……。」

受けてみた依頼のどれもこれもが非常に簡単すぎてしまった。

原因としては主に駆真が強すぎたのが多いが。

駆真が受けた依頼の種類は、討伐系が5つ、捕獲系が1つ、採取系が4つである。

が、討伐は一つを覗いてほぼ駆除に近い物で、捕獲はあっさりと採取は少し時間が掛かったものの、自分が欲しい鉱石なんかもとりつつ全て達成することが出来た。

なお、自分用に余分にとった鉱石類は《ボックス倉庫》に収納している為荷物にならなかった。

「証拠の品、確かに受け取りました。

では、依頼達成の報酬金はカードに振り込んでおきます。

また、クエストを規定回数こなしましたので、後日Eランク昇級クエストの受注が可能となりました。

では、またのお越しを。」

受付嬢に見送られ、駆真はギルドを出た。

今回のクエストで手に入った金は10万円程。

まあ、簡単なものばかりだったからこれ位が妥当だろう。

「とりあえず、何処かで工房を借りたいな。

あと、旅をする為の足も、だな。」

金の入ったカードを鎖付きの財布に仕舞い、街中を歩く。

途中で気になったものを買い食いしつつ、適当に歩いていると、人だかりが出来ているところを発見した。

そこに近づいて聞き耳を立てていると、どうやら数人の男達が一人の少女とぶつかり、そのせいで怪我をしたと喚いているとのことだ。

「全く、まさかこんな王道パターンが俺さんに起こるとはね。」

と、呆れ半分に呟きながらも、途中で何枚か買った覗き穴だけが開いた真っ白い仮面を着けつつ人だかりの中心に押し入っていく。

そこでは調度男達が少女を連れ去ろうと腕を持って動こうとしていたところだった。

「はいはい、そのDQN達。」

そろそろその娘の手を離したほうが身のためだと思うぞ？
と駆真はこのあまりに王道な展開を作り出した作者に呆れながらお前達を注意してみる。」

手を叩いて鳴らし、男達の意識をこちらに向ける。

気づいた男達は不機嫌そうにこちらにガンを飛ばしてきた。

「ああん！？なんだ、テメエ！？」

「俺？昨日ここに来たばかりの旅人。」

「その旅人が何のようだ？おい。」

「いや、随分と面白詰まらないことをしているなとおもってな。
なに、簡単な話だ。

てめえら、そろそろその女から手を離して俺とコロコロ死合おうじやないか。」

「はあ？なに訳わかんねえ事言ってるんだ？」

「ってか、お前まさか俺たちに勝てると思ってんのか？」

「当たり前だろ？」

じゃなきゃこんな阿呆なことわざわざするつもり無い。

第一、暇つぶしが見つからなくて困ってたところにお前らがいてくれて助かったよ。」

ニヤリ、と駆真は三日月のような裂けた笑みを仮面の内側で浮かべ、
Vナイフを引き抜いて起動させた。

ザワザワと周りが騒がしくなる中、『フィィィィン……』という

Vナイフの駆動音が周りの雑音に紛れている。

Vナイフを片手に持った駆真は、5、6人いる男達の中から一番近くにいた一人を選ぶと、そいつに話しかけることにした。

「そこのお前。

そう、お前だ。

さて、ここに取り出したのはどんな物でも原子を切り崩すことのできるナイフがある。

俺はこれでどうするつもりでしょう？」

「は？それはどういうー」

そこまで男は声を出すことが出来なかった。
なぜなら……

「正解はこうするのですた。」

駆真がそいつの首をVナイフで一閃して右肩から腕を切り落としたからである。

「ギヤアアアアアッアア！！！！」

「「「キヤアアアアアア！！！！」」」

切り落とされた男Aは絶叫し、周りで野次馬していた何人かが叫び声をあげてしまった。

「お、おい。こいつやべえぞ！？」

「ジョニーの腕が切り落とされちまった！！」

「お、俺たちも逃げようぜ！

このままこの場にいたら殺されちまう！！」

口々に言って逃走を図ろうとする男達だが、

「逃がさねえぜ？」

それを駆真が阻止した。

しかも、阻止と同時にVナイフを振るって男Bの足を切つて、だ。

「お、俺たちが悪かった！！

二度とこんなことはしない！！

だから頼む！俺たちを見逃してくれ！！」

「残念だがその選択肢は初めから存在していなんてね。」

そう言いながらVナイフからSナイフに切り替えて一人ずつ腕や足の腱を切断して二度と動けないようにした。

「ふむ。

まあ、こんなもんか。」

近くにいた男の服を使ってナイフに付いた血糊をふき取り、《倉庫》の落とす。

振り向いて少女に視線を向けると、少女から怯えた表情で見られた。

「あー……いきなりで済まなかったな。

立てるか？」

「は、はい……、大丈夫です。」

少女は返事をする立ち上がり、服の埃を払っていた。

「よろしい。

じゃあ、ここじゃ兵士に見つかる厄介だから移動させてもらうぞ。

「

え？つて、きゃっ……！！」

周りが騒がしい中、俺さんは少女を脇に抱えて屋根に飛び上がった。横抱き……所謂お姫様抱っこなんてしないぜ？

面倒なことに発展しそうな予感がしたからな。

屋根に乗ると、とりあえず今いる場所とは反対側の、兵士が来ない場所まで移動することにした。

屋根から屋根へと飛び移りながら走ること約5分。

屋根の上を飛び移りながら移動していると、初めは五月蠅かった少女も時間が経つと静かになってくれた。

住民や兵士の気配が無くなった事が確認できた俺は適度に広くて噴水という、分かりやすい目印のあるところに飛び降りた。

「ここでいいか。」

少女を脇から下ろしてガイドマップを見る。

ついでにこのマップの地図を《分析》、《定着》を使って記憶しておいた。

「成る程、今はここか。」

おい、お前。

ここから自分の家に帰れるか？」

「ふえ？」

あ、は、はい。。

ここからなら一人でも帰れます。」

「そうか、ならいい。」

じゃあそろそろ俺は行かせて貰う。」

「あ、待ってください！！」

そろそろ宿に帰ろうとすると、少女に呼び止められてしまった。

「なんだ？」

「あの、何で私を助けてくれたのか、理由を教えてくださいませんか？」

「理由？んなの簡単だ。」

ただの暇潰し。

それ以外に何にもないな。」

「そうですか……。」

「もう無いな？」

「あ、あと、最後にお名前を……。」

「名前？」

名前か……。

本名を出すのは面倒だし、偽名でいいか。

「あー……俺は『L*ie*』と言っておこつ。」

「リーさんですか。」

私の名はアマリスっていいいます。

それでは、今日は助けてくれて、ありがとうございました。」

「ああ、んじゃあな。」

そういうと、俺はまた屋根に飛び上がって宿の方面へと走り出した。だが、俺は知らなかった。

このアマリスという少女が勘通りの面倒な事を持ってくるものだとは……。

名も無き異世界 4話

騒動があつた日の翌日。

俺はこの街からでる準備をしていた。

理由としては、あれだけの騒ぎを起こしたのと、嫌な予感がプンプンするからだ。

その為、俺は朝市で買い揃えた品々をバックパックと《倉庫》に突っ込み、宿から出ようとしていた。

「んじゃ、ありがとござつした。」

「またのお越しを待ちしております。」

バックパックを背負い、外に出ようとする。

しかし、扉を開けた先には武器を構えた兵士達が宿を取り囲んでいた。

ボタン。

「マジでか。」

覗き穴から覗いてみると、目の錯覚でも何者でもなく、扉を取り囲むようにして兵士達が立っている。

俺はすぐさま引き返し、さっきまで使っていた部屋まで引き返して、扉の前に柵や机などの重い物で障害物を作ってから窓を開けた。

使っていた部屋は3階だった為、普通の兵士にはここに簡単に来ることは出来ない。

その間に《強化^{ブースト}》を使用し、窓から跳んで向かいの屋根に飛び乗った。

すると、跳んだ時に鳴った音に反応した兵士達が道に沿って追つて

きだした。

間違いなく俺さんを狙ってきている。

ただ、相手方は鎧や重い武器を持って走っているから少し速度を上げると直ぐに追いついてこなくなっただが。

「つと!!」

街の出入り口に向って跳んでいると、突如目の前からナイフが飛んできた。

それをすかさずSナイフで弾き、足を止めると、前方に一つの人影があった。

「へえ。」

これを避けるとか、君凄いな、うん。」

「お前、何者だ?」

そこにいたのは、白い軽鎧を身に付け、腰に1m程の長さのある剣を差し、背中に赤いマントを纏った赤髪的美青年がいた。
しかもそいつはむかつく事にイケメンである。

「僕かい?」

僕はアーマルシア・クラウド。

アマキリ騎士団の副団長を務めているよ。」

「ふうん。」

で、その副団長様が俺さんに何のようで?」

「なに、犯罪者たる君を捕縛しようと思っただね。
わざわざ駆り出されてしまったってわけさ。」

「それはご苦労なことて。」

でも、俺さんはここで捕まるわけにはいかないんでな。
さっさと逃げさせてもらおうとするぜ。」

「それは、困るなあ。

君を捕まえないと僕が団長に怒られちゃうし、なにより腐った大臣達に嫌味を言われちゃうからね。」

「そんなこと、知ったこつちゃねえな。

第一、俺さんは人を助けた(？)だけだ。

まあ、確かに過剰だったかもしれないが、あいつらどうせこの街で結構な悪さしてたんだろ？

だから、俺は何も悪くはないはずだぜ？」

「そうなんだろうけどね。

君みたいな不安要素は排除してしまえ、っていう王様の意向だから仕方ないよ。

僕もこれが仕事じゃなかったら喜んで逃がしてあげるんだけどね。」

「そいつは残念。

お前となら良い酒が飲めそうだったんだけどな。」

「全くだよ。

さて。

お喋りもこの位にして、そろそろ殺り合わない？」

「だな。

ここでお喋りして時間稼ぎされても困るし、カカツとお前を潰して逃走させてもらう。」

「そう。

でも、君は僕を倒すことが出来るかな？」

「出来るか出来ないかじゃなくて……やるんだよッ！！」

その言葉と同時に意識を仕事モードに切り替え、SナイフとWナイフを両手に持って弾けるようにして飛び出し、クラウドに飛び掛った。

接近し、右手に持つSナイフを振るうが、それをクラウドは即座に抜いた腰の剣を使って防ぐ。

俺はそのままの勢いで両手に持つナイフで次々と切りかかる。

だが、それをクラウドは両手もちにしてある剣で防いでいく。

「お前凄いな、おい。」

普通の人間ならこの連撃で終わるつてのに、しっかり全部防げてるし。」

「そりゃあ、僕は副団長だしね。」

この位出来なきゃ今の位置にはいないよ。」

「それもそうだな、つと！！」

連撃の合間を縫って横一文字に振るわれた剣をSナイフで逸らしながらバックステップ。

そこから反動を使って再び前に飛び出し、今度は脚やフェイントをも織り交ぜながら攻撃を加えていく。

すると、クラウドは流石につらくなつたのか、至近距離で手の平から火の玉を飛ばしてきた。

それを俺はぎりぎりですべてを屈めて回避し、そこからSナイフを逆手に持ってクラウドを殴って打ち上げた。

だがしかし、クラウドは宙に打ち上げられるも、空中で体を回転させて屋根の上に着地した。

「君ばかりに攻められるのも癪だから、そろそろ僕のほうからも攻めさせてもらうよ！」

「望む所だ、つてなあ！！」

そう言った瞬間、中心に赤いラインが伸びた剣を下段に構えたクラウドが接近してきた。

駆真もナイフを構えて迎撃しようとした。

が、切り上げられてくる赤いラインが伸びた剣に対して嫌な予感が走り、Sナイフで受けようとしたのを中止して咄嗟に右に避ける。

すると、先程まで駆真がいた地点に剣から炎が奔った。

その炎の熱が駆真の体を熱くさせる。

「つぶねえなあ、おい!!」

「これは予想外だよ。」

大抵の人なら今の一撃を受け止めて焼け死んでるのに、それを避けちゃうなんてね。

君は本当に何者なんだい？」

「俺は、ただのヒトを超えた何かさ!!」

そこから続けざまに振るわれる剣を駆真は避け、合間に《分析》を展開して赤く光る剣とクラウドを解析する。

「成る程、な。」

その剣、魔法剣か。

しかも剣自身もミスリルなんか使うとか、流石は副団長つか？」

「よく分かったね。」

それに中々魔法剣だって分かりにくくしてるはずなんだけど、何で分かったのかな？」

「ハン!! 敵に丁寧に教えるわけねえだろう、がつ!!」

「それもそうだ、ねっ!!」

《分析》し、理解した駆真はSナイフに今作ったAC《アレイション付加》で水属性を付加し、刃の射程が延びたSナイフでクラウドの剣を受け止めた。

「!？」

本当に君は凄いね。

犯罪者じゃなかったら騎士団に入隊して欲しいくらいだよ。」

「残念ながら、俺は数多の人を殺している殺し屋なんでね!!」

騎士団だなんてところに入れねえよ!!」

「そうかい!!」

何回、何十回と剣とナイフを交差させる駆真とクラウド。しかし、その剣劇も幕が下りようとしていた。

「おい、俺はそろそろ本気で逃げたいわけだが。」

「僕が逃がすとしても?」

「思わないな。」

だから、だ。

お互い、次の一撃で終わりとしようや。」

「……そうだね。」

僕自身、魔力の使いすぎで疲れてきたし、構わないよ。」

「オーケイ。」

そういうと、駆真はSナイフを収めて代わりにVナイフを取り出して闇と光を均等に《附加》し、クラウドは剣に魔力を凝縮した炎の魔法剣を作り、中段に構えた。

「……………行くぞ。」

「……………来い!!」

その返事が聞こえた瞬間、駆真は《強化》《加速》クイック《切断》スラッシュを展開してクラウドに身を低くして接敵した刹那、下段から一気にVナイフを切り上げた。

「つく、おおおおお!!」

「はっはあー!!」

気合一闪、とばかりに雄叫びをあげながら迎え撃つクラウド。しかし、ギミックを起動させたVナイフに剣が触れた瞬間、切先に

触れた部分から剣が分解され、砂となって崩れてしまう。
そして、クラウドは驚く間も無いまま左腕を切り落とされてしまった。

「俺さんの……勝ちだな。」

「そうだね……僕の負けだ。」

「ここまで俺さんと張り合えた奴は久しぶりだよ、全く。

いやはや、世界は広いというけど、本当だなあ、おい。」

「それでも君には結果として負けちゃったけどね。」

「まあ、それはいいとして、だ。

お前の左腕の細胞、斬った時に死滅させてしまったわけだがどうする？」

「治せるのなら治したいところだけど……まあ、今の技術じゃ元には戻せないだろうね。」

「だと思った。

そこで、だ。

俺さん治せるけど、どうだ？」

「……………どうせ君のことだ、当然対価を要求するつもりなんだろう？」

「ま、そりゃあな。

対価として、俺を絶対に逃すこと。

今回俺さんが使った力の全てを口外しない。

つてところか？」

後一つあるが、まあ、それは時期がきたら知らせることにする。」

「そんなことでいいのかい？」

「だったら喜んで支払うけど。」

「OK。」

交渉成立だ。」

そういうと、跪いているクラウドの左側に立った駆真が残った左腕

と《倉庫》から取り出したとある材料を使って《融合》^{ヒュース} 《接合》^{ジョイント} 《
痺》^{パラライズ}を展開して、クラウドに新たな腕を繋げた。

「略称工程完了、と。」

「どうだ？新しい腕は。」

「…………… 本当に君は凄いね。」

今の医者や技術者でもこんな風に傷口もなく腕を繋げるなんて絶対に無理だよ。」

「そりゃ、俺さん独自の物を使ってるからな。」

そんなことより、軽くだがその腕の説明をしておく。」

「何かあるのかい？」

「おおありだ。」

その腕にはまず骨に金属を使っていて、その金属がお前がさっきまで使っていたミスリルソードだ。」

「骨にミスリルだって？」

「ああ。」

まあそんなのは後回しだ、続けるぞ。

で、ただ骨をミスリルにただけじゃつまらないからそれに魔力伝達速度向上術式や腕力向上術式といった、各補助術式を組み込んでおいた。

術式は、お前が思えば発動するから普段は気にしなくていい。

時間がなかったからこんなものしか組み込めなかったが、まあ仕方ないだろう。」

説明している合間、新たな左腕の確認をしているクラウド。

「いや、それでも十分だよ。」

感謝するよ。」

「そうか？ならいいが……………」

まあそういうわけだから、頑張って使いこなせるようになりな。

んじゃ、俺は追っ手に追いつかれる前に逃げるわ、じゃな!!」

それだけ言うと、駆真は再び《強化》《加速》を展開すると瞬く間に門から出て行ってしまったのだった。

後にに残されたクラウドスは、着ていた上着を脱ぎ、肩に掛けながら駆真が逃げていった方向を見つめる。

上着を脱ぐと、そこにはささやかながら膨らんだ胸が。表すならBかCといったところか。

「クラウドス副団長!!こんなところにおられましたか!!」

と、眺めていると一人の兵士がクラウドスの元にやってきた。

「ん、どうしたんだい？」

「はっ!団長がお呼びとの事です!!」

「へえ、団長が……」

わかった、直ぐに行くと伝えてくれ。」

「了解しました!!」

そういうと報告に来た兵士は城の方面へと走っていく。

その後クラウドス自身も向おうとするが、もう一度逃げた方角を一瞥し、

「黒髪の犯罪者君……君は僕が必ず捕まえて見せてあげるよ。」

そう言って城へと向っていった。

その時の彼女の顔は、正に乙女表情だったと伝えておこう。

名も無き異世界 4話（後書き）

実はクラウドは女だったのさー！！

Ω Ω Ω（な、なんだってー！！）（

というわけで犯罪起こした駆真の逃走劇、という物でした。
いやね？

初めはもつと短くするつもりだったんですよ。

けど、思いついてしまつて次々と書き足して言つたらこんな事に。

r z

けど反省も後悔もしていないけどねっ！！（開き直り）

そんなわけでして。（どんな訳？）

次に参ろうと思います。

次は、新しい武器作りのための材料調達&武器作成回になると思います。

予定通りに行けばの話だけだね？

名も無き異世界 5話

あれから数日後。

何とか首都『アマキリ』から逃走できた俺さんは現在、水上国である『水藍の国』の首都、『ミツハノ』に来ていた。

ただ、顔がばれない様にコートについてあるフードを深く被って、だが。

その理由は、指名手配されたからだ。

賞金は日本円で五千万。

捕獲限定であるが、それでも賞金稼ぎ達に狙われているんだ。

「まったくもって面倒な……。」

こんな事ならあの時ばれないようにしときゃあ良かったぜ……。」

そんなことを愚痴りながらも、俺は水路脇の道を歩いていく。

今回ここに来たのは、この国付近に生息しているという海龍から素材を取る為にきているのだ。

え、何故海龍の素材が欲しいかって？

この間手に入れたレア鉱石と海龍の素材を使って新しい武器を作りたいからさ。

流石に今の武装じゃ貧弱……というより、銃弾の節約のためだな。

レイジングブルとベレッタ、両方の弾丸を合わせても300発位しか残りが無いから前の世界みたいに無駄撃ちが出来ないんだ。

だからそれに代わる射程の長い武器と、あと刃物も一本欲しいから、つてのが今回の主な理由。

あああと、この国が海に面していて、観光リゾート地としても有名なからつてのもあるな。

まあその位か。

「にしても……まるで迷路みたいだな、おい。」

入り口近くの宿をとった後、この国のガイドマップを見ながら歩いているが、如何せん水路と歩行用通路とが入り組んでいて迷いやすい。

いや、空を飛べば早い話なんだろうけど、この世界では空を飛ぶ方法というのがまだ確立されていないらしく、魔法使いの中でも、上級のほんの一握りくらいしか空を飛べるものがないとかどうとか早い話、目立って追われたくないってのが本音だ。そういうわけで、今は歩くしかないということ。

「で、その海龍がでる区域がここか……。」

街を抜け、海岸沿いに歩くこと数十分。

ごつごつとした岩肌の多い崖に來ると、なるほど。

確かに生息していそうだ。

そこから見える海は、いたる所に渦が巻き起こっており、何人たりとも寄せ付けないと息巻いているようだった。

その地点から《検索》で海の中を調べてみると、深い位置にだが生体反応が。

個体の特徴と照らし合わせても一致する。
間違いなく、海龍だった。

「獲物ハッケーン。」

「そんじゃ、行くぜっ!!」

見つけるや否や、早速魔法を用いて水中でも自在に動けて、息も出来るようにしてから荒ぶる海に飛び込む。

飛び込んで下に潜っていくと、東洋の伝説などに出てくる龍に似た姿の海龍がいた。

違いといえば、鱗が滑らかで、頭部や背中に魚のヒレ見たいなものがあって、手に珠を持ってないこと位か。

そいつはこちらを見つけると、水流を俺目掛けて飛ばしてきた。それに当たるわけにもいかないからと、横に移動して回避。

回避地点から水を足場にして海龍へと接近する。

接近してみると、改めて海龍の大きさがわかる。

なんせたままた近くにいたマッコウクジラに似た生物を一口で飲み込んでしまうほどだからだ。

これならあの街『ミツハノ』で水神として奉られる事も納得できる。

「さあて、と。」

とりあえず交渉でもしてみますかね。」

そう呟き、《検索》を展開してこの世界の全ての言語を《取得》、ダウンロードそして《定着》させる。

その中からこの龍と話せる言語を選択し、話しかけてみた。

「あー……その海龍さん。
ちよっとお話いいですかね？」

話しかけると、龍の動きが止まり、駆真のほうに向きを変えた。

『……………今話しかけてきた者は貴様か？』

「おっ、通じた。」

その通り。

俺さんが今、お前に話しかけた。」

『よもや今の時代にワシと言葉を交わせる人間がいるとは……。』

貴様、名はなんと言う？』

「俺さん？」

俺さんは皇木駆真。

ヒトの枠組みから外れた何か、さ。」

『ふむ……カルマ、か。』

しかと覚えた。』

「そいつはうれしいねえ。

で、だ。

本題に入りたいんだが、いいな?」

『久方ぶりに人間と言葉を交わせて今は気分がいい。
聞いてやろう。』

「オーライ。」

単刀直入に言おう。

お前の牙、鱗が何個か欲しい。」

そついうと海龍の様子が少し変わった。

『……………なに?』

「うん、だから。」

お前の牙と鱗が何個か欲しいんだって。」

『それは、聞けぬ相談だな。』

他の事なら聞かんでもやらないことも無いが、それは許されない。』

「あ、やつぱり?」

まあ、そついうと思ったからここで一つ提案が。」

『なんだ? 申してみよ。』

「俺さんと戦おうぜ。」

『クックク……………』。

何を言い出すかと思えば、そんなことか。

貴様のような人間がワシに敵うとでも思っているのか?』

「まあ、『普通』なら敵わないけどね……………」。

だからハンデ。

お前さ、人型になってくれない?」

挑戦を叩きつけている割にかなり上から目線な駆真。

『人型に、じゃと？』

ワシになんの益があるというのだ。』

「なぜかって？」

俺さんは唯のヒトの枠組みから外れた何かなただだって言うのに、体が大きくて魔力も桁違い、扱う魔法はほぼ全で一撃必殺級、一度暴れば国の一つや二つを破壊できるほどの強さを持つ海龍なのに、手加減の一つや二つ、出来ないわけが無いだろう？

それに、もし人型で戦ってくれたら海龍のことすつごく尊敬しちゃうし、あこがれると思うなあ。チラチラッ」

『ふ、ふん。』

そんなに言うのならば、せつだから人型となってやろう。ありがたく思うのだな！！』

そういうと、海龍は一瞬だけ光を放ち、人型となった。

その姿は、深い青色の髪をもった20代位な全裸の女性であった。

ふっ……………ちよろいな、おい！！（黒笑）

「うおおー、海龍様、すっげえ！！（棒読みと分らない位の棒読み）」

『どうだ、凄かろう？』

俺に棒読みと分らない位の棒読みで褒められて満更でもなさそうな海龍。

というか、海龍って雌だったのね…………。

「まあ、海龍が凄いだのどうのは置いといて。さっさと始めようか。」

『そうじゃな。』

貴様のような人間、海の藻屑にしてワシの飯にしてくれる!！」

「それは怖い。

んじゃ、いきますよ、っと!！」

『こい、人間!！」』

その言葉と同時に、俺さんと海龍の戦いが始まったのだった。

名も無き異世界 6話

結論だけ言おう。

海龍との勝負に俺さんが勝った。

勝負は三日三晩続き、近隣の都市やら何やらを巻き込んで被害を出してしまいつつも、陸、海、空と、全てのフィールドを使って戦い続けた。

始めは、海の中だったこともあって俺が押され気味だったが、途中で空に打ち上げてからは互角に、いや互角以上に戦った。

そして、最後は地上でSナイフを海龍の首元に突きつけたことで勝負が決したのだった。

で、現在なのだが……………

「ええい、H A N A S E E ! !」

「いやじゃ。」

放したらお主、速攻で逃げるではないか。』

「当たり前だろうが ! !」

なんで倒した後、お前に『お主…………ワシの主人となれ ! !』なんていわれなきゃならないんだよ ! !」

『よいではないか。』

一国で水神と崇められていたワシと共におれるのじゃぞ？

これほど良い事は無いではないか。』

「そう思えるのはこの世界の人間だけだよ ! !」

第一、俺は世界の旅人だ。

ずっとこの世界にいるわけじゃないんだぞ？」

『それはもう聞き飽きたわ。』

そんなことより、ワシとどうしたら一緒におれるか探すとしてようではないか。』

「くそつ、面倒だ………… ! !」

といった感じで俺が倒した海龍……ディーネが人型の姿で俺について来だした。

素材は倒した後、素直に渡してくれたが……

まあ、そんな状態となった俺さんだが、現在金絡の国の首都『カナマコ』に来た。

ここは工業の国で、一番技術的に発展しているであろう都市だ。

そこに数日前に来た俺は、町外れにあったレンタル工房に来ていた。理由はこの間手に入れた鉱石類とディーネの素材を使って武器に加工する為である。

探してみると意外とあるもので、レンタル工房だけで二十も見つけることが出来た。

その中から値段以上に良い設備の工房を借りることが出来、今まさに作業を始めよう……と言つところである。

「まあ……こんなものか。」

今回使う鉱石は偶然手に入れたアダマントタイトという鉱石で、薄い青色の鉱石で、この世界の鉱石の中でも最上位の3位に位置する物との事。

もう一つは、この間の貰ったディーネの鱗と牙だ。

その1kg程ある鉄塊と海竜の素材を地面に置き、自分の傍らにイメージ図を置いて準備完了。

両手には既にACの展開は完了しているため問題ない。

今回することは凄く簡単。

某錬金術師的な要領で自分の欲しい武器の形へと形成するだけだ。

「そんじゃ、《錬金》^{アルケミィ}……！」

両手をパン！と音を鳴らして合わせ、アダマントタイト鉱に手を当て

る。

すると、鉾石が光だし、その形を変え始めた。

唯の塊であった鉾石は薄く、細く、長くとその姿を変え、十数秒もするとそこには、淡い青色の光を放つ一振りの片刃の直刀があった。

「よし、成功……だな。」

出来上がったばかりの直刀を手に持ち、じっくりと眺める。

刃の長さが大体1mほど。

茎なかじも含めると1・3m位の長さの物となった。

「初めて作ったにしては中々良い出来だな、うん。」

腕に来る確かな重みを実感し、改めてこの直刀を作れたことを確認する。

それが終わると、茎に銘を彫り、次に事前に用意しておいた柄の材料を使って柄を取り付けた。

柄は貰った中で中位の大きさだった牙を用い、上手い具合に加工して柄とした。

柄頭には海龍の頭をモチーフにし、海龍の口に鎖でつなげた三日月が取り付けられてある。

『どうじゃ？』

出来たのか？』

まだ鞘の無いままの剣を持って観察していると、工房にディーネが入ってきた。

「おう、初めて作ったにしてはかなりの自信作だ。」

『ほう、それはよかったの。』

それでじゃが、これを見て欲しいのじゃ。」

と、不意に新聞を手渡された。

この世界にも新聞はあるようで、魔法による印刷技術や通信技術でこうして新聞が作れるらしい。

それはともかく、その中身を見てみると……

『「水藍の国の首都、『ミツハノ』を襲った津波！！

原因は水上で戦っていた二人の人間のせい！？」

一週間前、7月10日。

何の前触れもなしに突如として巨大な津波が起こり、水藍の国の首都『ミツハノ』に大打撃を与えた。

巨大な津波は瞬く間に『ミツハノ』に迫り、ヒトや建物といった、全てに対して被害を与えていつてしまった。

この原因は定かではないが、街の民に聞き込みを行った所、海上で戦っている二つのヒトガタの姿をみた何人かから聞きだすことが出来た。

一番良かった証言は、ヒトガタの片方は黒髪で、もう片方は深い青色の髪をしていたとのこと。

現在、その二人を『ミツハノ』のトップは重要参考人として探しているとのことである。』

「……………まじで？」

『オオマジじゃ。』

新聞の内容、それは駆真とディーネが指名手配されたという内容であった。

「おいおい…………あの勝負でそこまで被害があったのかよ。」

『よくよく考えれば、確かにやりすぎたかもしれないのう。』

ワシも、久方ぶりの戦闘だからということ年甲斐もなくはいでしまっておったし。』

おもわず頭を抑えてしまう駆真。

それからしばらく悩んだ後、決めたのか頭を上げた。

「よし。

とりあえず、この武器の鞘を作って明後日までに仕度を済ませ次第、この街を出るぞ。」

下手したらこの街の騎士団的な連中に囲まれちまう。」

『それは……………面倒そうじゃのう。』

分かった、そうするとしようかの。

ところで何じゃが…………その薄くて長細い剣は何なんじゃ？

どうやらワシの素材をつこうておるようなんじゃが…………。』

「こいつは直刀って言うて刀の一種。

刀って言うのは、『斬る』ことに重きを置いた剣のことで、『折れず曲がらずよく切れる』ってのが謳い文句だ。

で、俺のは『折れず曲がらず欠けず錆びずよく斬れる』ってのを込めて作り上げた物。

名を『月輪』という。」

『ほう、武器は殆ど使う事が無いからわからんが、何やら凄そうな物じゃのう。』

「そうか？

まあ、アダマントイト使ってるし、ACも埋め込んでるから結構な物だろうな。

それはいい。

そんなことより、俺は今から鞘製作に取り掛かるから、ディーネは食料やこの国限定の物なんかを買ってきてくれ。

金は渡した分は全部使ってくれても一向に構わないから、行ってこい。」

『了解なのじゃ。』

そう返事をしたディーネは工房から出て行ってしまった。

「さてと……これから面倒なことになりそうだ……。」

そう呟く駆真も、月輪を手を持ったまま工房の中に戻って鞆作りを始めるのであった。

名も無き異世界 7話（前書き）

今回はかなり長いです。

結構主人公が色々言ってますが、これは作者の一つの考えであり、特に意味は無いと思ってください。

名も無き異世界 7話

『カナマコ』を出発した俺達は、まだ行っていない他の国に旅して回った。

行く先々にあつた大図書館や王城に侵入しては閲覧禁止指定されている魔道書の中身を《取得》と《定着》したり、強力なモンスターが生息する山脈やらに行つては希少な鉱石をウマウマしたりしていたおかげでか、行く先々でトラブルに見舞われながらも濃い時間を過ごすことが出来た。

具体的には、武芸国である火天の国の首都『カグツチ』で開催された大闘技大会で優勝。

学術国である木仙の国の首都『ククノチ』にある学校で一年ほど教師を。

商業国である土狩の国の首都『ハニヤス』で商会を起こして一儲け。宗教国である日花の国の首都『ハバクニ』で真っ黒に染まった上層部や貴族の一掃。（抹殺的な意味で。）

水藍の国の首都『ミツハノ』は俺さんとディーネの戦闘による被害からあと少しで立ち直れそうであつた。

月光の国の首都『アマキリ』では俺さんの人物画が指名手配書として出回っていたので立ち寄ってもすこし覗く位で終わってしまった。ただ、クラウスが俺を見つけて追っかけて来ていた。

理由を聞いてみた所、なんと俺に惚れてしまったんだとか。

いわゆる「抱きしめたいなあ、ガンダム！」的なものだ、恐らく、きつと、たぶん、メイビー……。

出合い頭に「やあ。」とだけ挨拶してから攻撃して来るんだから、まず間違いないと思いたい。

あと、金絡の国で新しい武器を何個か作つた。

前に作つた『月輪』の兄弟刀で、名は『日輪』。

ベースカラーは薄い赤色で、形は月輪と同じ。

形は月輪と一緒だが、刀身には炎を模した紋様が彫られており、柄頭には月輪と同じように竜の頭を模した物に鎖を啜えさせて鎖の先にリングが付けられている。

素材にはヒイロカネと紅竜の素材を使った。

そいつは全力全開で殺しに掛かった為、殺してしまったが、かなりの強敵であつたことに間違いは無い。

以降、日輪と月輪を双剣として使っている。

次にオリハルコンと覇鬼という最上位の鬼の素材を使った機械手甲拳『はやく覇刃鬼』。

ベースカラーは灰色。

肘から先を丸々覆う形で、吸収機能、ブーストスラスタ、パルフィマキオーナ、エフィールド、パイルバンカー、他色々と、結構力オスな多目的機能手甲となつてしまったものだ。

初めは吸収機能とブーストスラスタとパイルバンカーだけのはずだったのだが、後から色々と発想が出来てしまい、最終的には俺しか絶対に扱えない物となつてしまった。

次に大鎌『たまきり靈斬』。

白竜の素材と白晶石という鉱石を使って作り上げた物で、ベースカラーは純白。

敵を切り裂いても自動で血が拭われるという親切設計で、普通は使にくいと言われているが割と使いこなせている。

そして、大剣『崩天』。

素材に黒龍の素材と、黒皇石という鉱石を使って作り上げた。

一振りで地を『裂』き、二振りで天を崩すほどの威力を持つ。

その為、ある意味切り札的存在となつてしまっている。

あと、ベレッタカスタムとブルカカスタムも改造しており、見た目も大きく変わったため、名前を変えた。

まあ、それは後で出すからいいでしょう。

だからか、『マルチウエボン錬装士』、『葬拳』、『白い死神』と、色々な称号をいただくこととなつてしまった。

その後、8年掛けた旅を終わらせてから、どの国にも属していない大きな無人島に城を建てて住み始め、50年近くが経とうとしていた。

理由としては、やんちゃし過ぎて様々な国から指名手配される存在となってしまうからだ。

だからか、『魔王』の称号が復活していた。

その間に、クラウスは23歳になった時、魔剣士となって不老になり、ディーネと俺は正式に契約を結んで主従関係を結び、各地にいた孤児や異端種だったモンスターをペットとして飼ったりと、色々としていた。しかし、俺は今、勇者と名乗る一行と城にある謁見の間で対峙している。

そいつらと対峙している俺の今の姿は、黒いボロボロの外套に三つの穴が空いた仮面を付けているだけだ。

『魔王』ということとでそれっぽい格好にしてみた結果である。

で、その勇者曰く、俺の存在は世界を脅かす害悪なんだと。

ディーネやクラウスは……………こいつ等に殺された。

ディーネはこの島の間にある海で、クラウスはこの城に続く道中でやられたようだ。

それ以外にもペットのケロたん（ケルベロス、♂）、トリッピー（グリフォン）、エルフと人間のハーフだったエドワード（♂）と、俺の仲間やペット達も、この勇者御一行（冷笑）にやられた……………

…。

ただ、殺されてしまったが皆の魂は俺の傍にいてくれている。

「そついうわけだ、魔王！！」

お前はこの世から消え失せろ！！」

金髪碧眼のイケメン勇者が俺にそういつてくる。

こいつらのパーティは、このイケメン勇者を筆頭に、巨乳女魔法使い、ロリ女騎士、長身モデル型女武道家だった。

……こいつらは俺に、俺様に喧嘩を売っているのか？
いや、喧嘩じゃなかったな。
戦争を仕掛けてきているんだった。

「はん、高々１７、８歳かそこらのガキに消え失せるだなんて言われるようになるとは、俺さんも落ちぶれたもんだねえ……。
でもさ……お前ら、俺の大切な仲間やらペットを殺したんだ。

当然、覚悟は出来てるよなあ？」

発言と共に俺はその身に蓋して閉じてあつた殺気を解放する。
俺さんの、俺様の大切な奴らを手に掛けたんだ。
その位の覚悟は当然有るんだろう？
なあ、勇者（嘲笑）よ。

「う……ゆ、勇者さま……！」

こんな極悪非道な奴の言葉なんかを聞く必要などありません！！
さつさと魔王を倒して平和を手にしましょう！！

「そ、そうだな……！」

諦めちゃ駄目だよな……！！」

魔法使いが殺気の波動に怯まずに勇者に語りかけ、勇者を鼓舞する。
しかしこの勇者、本当に何も知らないようだな……。

「なあ、おい。

お前らにいくつか聞くが、お前らは真実を知った上でここに来て
いるのか？」

「それは、お前がこの世界を破滅させるということだろ？」

「……クッククク……。」

世界を破滅か。

それも中々面白そうなものだな。

ディーネやクラウド達と一緒に頑張ってやってみたら面白いだろうな

……。

けど、そいつらはもういない。

どうしてだと思う？」

「それは……………」

俺からの問いに勇者は答えが詰まる。

他の奴らも同じように、だ。

「答えられないよなあ……………」

全部、全部、ぜんぶ……！お前らが殺していったもんなあああ……！
一人も、一匹も残さず……！全員……！

俺様は思わず床を思い切り踏み、そこに床を陥没させてしまう。

「そ、それはお前の配下が各地で暴れたりするからだろ……？」

と、女武道家が虚勢を張って言い返してきた。

「配下？冗談……！」

あいつらは配下なんかじゃ断じてねえ。

あいつらは、俺様の家族だったんだ。

勿論、血は繋がっちゃいなかったし、種族も何もかも違った。

けどな、あいつらは生きていた間、何もかも違うモノ同士でも家族
となっていたんだよ……！！

それに、俺の家族が各地で暴れていた？

あいつらが何をした？

何もしてなかっただろう？

あいつらはただそこらで生活していただけだったのに、それを恐怖

したヒトの勝手で殺されたんだ!!

お前らに!!

あいつらは決して自分からは手を出すような存在じゃない、俺様が
そう教え込んだからな。

そうじゃなけりや、たまたまそこに来ていた所を目撃されて、近隣
の住人達が騒ぎ立て、討伐するように言われた……じゃないのか？
違うか？どうだ？!

「そ、そういえば……………」

そこまで言つと、女魔法使いが心当たりがあるのか、ハツとした表
情になっていた。

「やつぱり、か……」

おおかた、他の場所でもそうなんだろうな……

例えば、普通なら森の中にいない筈のケルベロスがいた。

襲われては敵わないから討伐してくれ、だとか。

何故か海辺の近くの崖に巢を作り始めたグリフォンがいる。

だから以下略……………的な内容とかな。

まあ、今となつては皆死んでしまつてもう居ない……

お前らに全員殺されたんだからな……………」

「……………」

「だんまり、か。」

なあ……………」

ディーネとクラウドに止めを刺したのは誰だ？」

「…………俺だ。」

「やつぱりか、糞勇者。」

なあ、あいつらはどうやつて殺されたんだ？

心臓を一突きか？

頭を弾けさせてか？

体を爆発させてか？

首を切り落としてか？

お前の必殺技的なもので蒸発させてか？

なあ、あいつらの死に方はどんなのだったんだよ。

俺に教えてくれよ。

お前を全く同じ方法で殺してやるからさ。

ああ勿論、アフターサービスで魂を輪廻に還すことなく、だ。」

「……なっ！？」

俺の発言に反応したのは勇者以外の三人。

どうやら俺様の殺してやる宣言に反応しようだ。

それでか、勇者の前に出てきて構え、勇者を守る形となった。

「なんだ？文句あるのか？従者、いや、勇者の雌ども。」

「雌って……！！」

か、彼は異世界から勇者として召喚された一般人だった人です！！

そんな彼を貴方なんかには殺させはしません！！」

「私達は彼に惹かれ、私達の意志で彼について来ていた。

その彼をお前に殺される訳には行かない！！」

「……………守る。」

それぞれが覚悟を決めて前に出てくる。

「クツクツ……女に守られる勇者とは……………」。

中々に滑稽で可笑しくて情けない勇者様だな。

で、その情けない勇者はどうする？

このまま女に守られながら死ぬか、雄雄しく戦って華々しく死ぬか、それとも、女に守られた上で尻尾を巻いて逃げ帰るか、どうしたい？」

「俺は……………」

みていると、勇者は俯き、拳を握っている。

そして答えが出たのか、覚悟を決めた瞳で駆真を見上げた。

「俺は、お前を倒して皆で国に帰り、世界を平和にした後で罪を償う！！」

「あっそ、でも残念。」

そういった瞬間、駆真は《倉庫》から瞬間的に取り出したレイジン・ブルカスタムを更に改造した魔銃『アグニ』で女従者の心臓目掛けて連射した。

女魔法使いは反応できずに撃ち殺され、女武道家は辛うじて反応できたが避けれずに肩を撃ち抜き、女騎士は鎧が分厚かったのが幸いとなって心臓に当たることはなかったが、衝撃で膝を付いていた。

「セレス！！」

「があ！！」

「……ッ！！」

勇者が女魔法使い……セレスにすぐさま駆け寄り、抱き上げた。他の面々も当たったところを押さえながらも近づいていた。

「おい、しっかりしろ！！セレス！！」

「ふ、ふふ……勇者様。」

最後にお役に立てず、申し訳ありません……。」

「いいから！！」

傷口に響くから喋るな！！

ルーナ、直ぐに回復を！！

レイラはルーナに補助呪文を！！」

「わかった！！」

「……了解！」

女騎士ルーナと女武道家レイラに指示をだして自分も回復魔法を使

始める。

しかし、一向に治る気配は無い。

「なんでだ、なんで治らないんだよ!!」

俺は最強のはずなのに!!」

「勇者様……私はもう助かりません……。」

「そんなこというなよ!!」

お前のことは俺が絶対に助けるから!!」

「私の体は私自身が一番分かります……。」

ですから勇者様、お願いです……。」

そこまで言うと、血を吐くセレス。

「どうか、かならず魔王を倒して下さい……。」

「ああ。」

必ず、必ず倒すから、だから生きてくれ、セレス!!」

「ごめんなさい……その頼みは聞けそうにありません。」

それじゃあ、後は頼みます、ルーナ、レイラ……。」

最後にそういうと、セレスの命の灯が消えてしまった。

「くそっ!!」

「セレス……。」

「魔王……絶対に許さない!!」

仲間の死を目の前にし、怒り心頭といった具合になった勇者達。
そしてその光景を見終わった駆真。

「あ、やっとお涙ちょうだいな三文芝居的な展開は終わった?」

「魔王……お前には人の血が流れているのか!!」

「えっ、そりゃあ、血は流れてるよ？」

でもさ、さんざん俺様の家族殺してきた奴らが仲間一人死んだくらいで何怒ってるんだ？

仲間が死ぬ位、覚悟してなかったの？馬鹿なの？死ぬの？

てゆうか死ねよ。」

「魔王、お前は、ここで、必ず倒す！！」

「セレスの思いは無駄にはしない！！」「……倒す！」

「ハン、やっとか。」

まあ掛かってきな、全力で。

さすればこの身に届くやもしれん。」

その言葉を皮切りに、勇者パーティは各々の武器を構えて襲ってきた。

勇者は腰に提げていた光り輝く剣で切りかかり、ルーナは大盾を前に突き出しながら槍で突き、レイラは補助魔法を自身にかけて拳のラッシュを仕掛ける。

それに対して駆真は『アグニ』を《倉庫》に戻し、代わりに『日輪』『月輪』を取り出して全てを弾いた。

それどころか、開始数分で勇者一行が攻撃側だったのが駆真の攻撃ターンとなっていた。

「はははははははははははははははは！！！！」

どうした勇者！！

仲間が死んで覚醒（爆）フラグがたったのかと思えばそんなこともないのかよ、おい！！

激しくつまらねえやつだなあ！？」

「くっ……！！」

「流石に強い！！」

「……まずい。」

双刀で怒涛の攻撃を仕掛け、さらにすかさず武器を変えての連撃、

その繰り返しだけで勇者一行は開始十数分で激しく消耗していた。

「おいおい、地球出身の勇者。」

お前はテンプレ通り召喚されて勇者となってきたんだろう？

なのこれって、お前、本当に糞なんだなあ。」

「なっ！！」

なんで俺が地球出身だってことを！！」

「なんでかって？

なぜなら俺自身も地球出身だからさ。

まあ、お前の住んでいた地球と全く同じかどうかは分からないがな。

」

跳んで斬りつけて来る勇者。

しかし、それを駆真は月輪を持つ片手で受け止め、鐔迫り合いに持ち込む。

「ならどうしてこんなことを！！」

「どうして？

それこそどうして、だ。

だいたい、俺様は旅し終えた後、ここで研究に勤しみながらただ静かに暮らしていただけだ。

奴らもそう！！

ただここから巢立ったり、伴侶探しに旅していただけだった！！

その平穏を邪魔したのは他でもない、七国なんだよ！！」

「そんなの、答えになっていない！！」

勇者と切り結ぶ戦闘の中で、会話する駆真。

「まあ、そりゃあ、昔にはやんちゃもしたさ！！

けどなあ！！」

奴らは、この島が資源の宝庫だと分かるや否や、俺を魔王と称し、

この島に攻撃を仕掛けてきた!!

俺様はそれをただ迎撃していただけた話なんだよ!!」

「嘘だっ!!」

「それが嘘じゃねえん、だよ!!」

武器を素早く双刀から『靈斬』へと替え、思い切り横薙ぎに振りぬく。

「さあ、もうお遊びは終いだ。」

「ふざけるな!!」

俺はお前を倒すんだ!!」

「私達は、お前を倒すまで諦めない!!」

「……倒す!!」

「ああ、そうかい。」

でもな、俺はもうお前らの相手なんか『飽きた』。

だからお前ら、死ね。」

駆真はそう言うのと、『倉庫』から『崩天』を取り出し、崩天に仕込んである能力を発動させた。

その能力は「刃群(the edgemaster)」。

効果はどのような刃物類、例え神話上のものでも、ありえない大きさの物であろうと顕現させ、操るというものだ。

簡単に言うなら、UBWの固有結界が使えない版みたいなものだと思ってくれていい。

「形状は槍。

効果は『必中』『貫通』『加速』『消滅』。

数は1万を五回。」

告げると、駆真の頭上に勇者一行に矛先を向けた槍の群れが並んで

いた。

「なっ……。」

「うそ……だろ。」

「……勝てない。」

「絶望と共に消える。」

……穿て、刃群。」

駆真の呟きと共に、容赦なく勇者一行に槍の雨が降り注いだ。

始め少しばかり防いだもののすぐに貫かれ、そこに肉を一欠けらも残さんと槍の嵐が殺到する。

しばらくして五万の槍が降り終わったため全て消すと、そこには三つの血溜りと槍が刺さった跡以外、なにも残っていなかった。

「終わったか……。」

それだけ呟き、武器を《倉庫》に戻して自室へと歩いていく。

そこから必要なものだけを詰め込んだバックパックを取り出し、背に持って城を出た。

「もうこの城も使えないな……。」

消しておくか。」

呟きながらA C《粉碎》を展開してから城に触れて粉々にし、その後《錬金》で巨大な十字架を作り出した。そこには今まで駆真と家族だった者達の名前が全て刻まれてある。

「後は……と。」

再び《倉庫》から『崩天』を取り出し、「刃群」を発動。

座標を指定して『破壊』『消滅』『絶対』の効果を持った超巨大な

剣を作り出し、七国に射出した。

それから数分後、全ての国の首都上空に鎖の巻きついた巨大な黒い剣が出現し、都市に向かって落下。

数分後、一瞬にして各国の首都がこの世界から消え去った。

「これでよし……。」

「んじゃ、次の世界に行くとしますかね、と。」

言いつつ、目の前に腕を突き出し、A Cを展開した。

「《^{ゲート}回廊》展開成功。」

ではgood byeこの世界、hello次の世界。」

そういつて、駆真は《回廊》によって出来た穴に飛び込み、この世界から姿を消したのだった。

キャラ紹介〜2回目〜

名前：皇木 駆真

年齢：21歳（59歳）

性別：男

種族：ヒト↓魔王？

身長：181cm

体重：67kg

持ち物、武器等……

超硬度ナイフ（Sナイフ）×1

超振動ナイフ（Vナイフ）×1

ワイヤーナイフ（Wナイフ）×2

紅之刀『にちりん日輪』new

蒼之刀『がちりん月輪』new

機械鉄甲拳『はばき霸刃鬼』new

死鎌『たまきり靈斬』new

黒剣『ほうてん崩天』new

轟銃『アグニ』new

嵐銃『ルドラ』new

各種弾薬

ライター

ライター用オイル

金（100億以上）

携帯

充電器

バックパック

new紹介

蒼之刀『月輪』

駆真の作成武器その1。

アダマンタイトと海龍であるディーネの素材を用いて作られた。
ベースカラーは青で、刀身には水を模した紋様が彫られている。

鐔は半月を象った物を嵌めており、柄頭には三日月を付けた鎖を啜えた龍の頭を模した物が付けられている。

能力は無く、『折れず曲がらず欠けず錆びずよく斬れる』の概念を込められている。

紅之刀『日輪』

駆真の作成武器その2。

ヒヒイロカネと紅竜の素材を用いて作られた。

ベースカラーは赤で、刀身には炎を模した紋様が彫られている。

鐔は太陽を象った物を嵌めており、柄頭にはリングを付けた鎖を啜えた竜の頭を模した物が付けられている。

能力は無いが、『月輪』と同じ概念が込められている。

普段から、『月輪』と『日輪』を双刀として使っている。

機械鉄甲拳『霸刃鬼』

駆真の作成武器その3。

オリハルコンと霸鬼という、最上位の鬼の素材を用いて作られた。

ベースカラーは灰色で、表面に鬼の頭部を模した紋様が彫られている。

肘から先を丸々覆う形で、吸収機能、ブーストスラスター、パルフィマキオーナ、エフィールド、パイルバンカー、小型2連ガトリング砲、他色々の機能をもつ多目的機能鉄甲タクティカルアームとなっている。

開発当初は吸収機能、ブーストスラスター、パイルバンカーのみの筈だったが、途中から色々付け加えてしまった為、カオスな性能に仕上がってしまった。

非常に硬く、並みの攻撃や魔法などでは傷一つ付かない。

最低でもネギまの『千の雷』クラスの攻撃でないと意味がないほど。試しに挑んできた賞金稼ぎに使わせてみれば、見事に腕が千切れ飛んでいた。

その為、能力は込めていない。

死鎌『靈斬』

駆真の作成武器その4。

白晶石という鉱石と白竜の素材を用いて作られた。

ベースカラーは純白で、刀身に竜を模した紋様が青い線で彫られている。

長さは2mほど、刃だけでも1m以上ある。

敵を幾等切り裂いても血が自動で拭われるという親切設計。

能力は「魂斬(the soulvannisher)」。

切り裂いた物質に宿る魂を切り裂き、砂塵と化させる事が出来る。

ただし駆真は除く、であるが。

葬剣『崩天』

駆真の作成武器その5。

黒皇石という鉱石と黒龍の素材を用いて作られた。

ベースカラーは黒で、刀身に龍を模した紋様が赤い線で彫られている。

長さは1・5m程で、両刃の大剣である。

一振りで地を『裂』き、二振りで天を崩すほどの威力を持つ為、ある意味切り札的存在となってしまうている。

能力は「刃群(the edgemaster)」。

効果はどのような刃物類、例え神話上のものでも、ありえない大きさの物であろうと顕現させ、操るというもので、簡単に言うならUBWの固有結界が使えない版みたいなものだと思ってくれていい。

また、顕現した刃物に能力を加えることも出来、最大で5個まで加える事が可能。

轟銃『アグニ』

駆真の改造武器その1。

元はレイジング・ブルカスタム。

形状は、銃身は30cmで、銃身の下部に刃が付いており、近接格闘戦が可能。

特に威力を重視しており、普通に撃てば、人間なら上下の半身が泣き別れ、岩を砕き、大木をへし折ることが可能。

その気になれば大きなクレーターを作り出すほどの威力にすることも。

魔力弾と実弾とを切り替えることが出来、魔力弾ならゴム弾クラスの威力から、大陸間弾道ミサイル並の威力まで変える事が可能。

実弾時の威力は対戦車ライフル並で、銃弾は・500S&Wマグナム。

嵐銃『ルドラ』

駆真の改造武器その2。

元はベレッタM93Rカスタム。

特に連射を重視しており、フルバーストで秒間50発の連射が可能。これも魔力弾と実弾の切り替えが可能。

実弾なら威力はデザートイーグル並で、銃弾は・44マグナム。

「バースト起動」とキーコードを言うと、銃身が上下に開き、レールガンを撃つことが出来るようになる『バーストモード』への変形が可能。

連射は出来ないが、5秒に一発撃つことが出来る。

人物紹介

名も無き異世界に流れ着いた元人間。

今はヒトを超越した何かから魔王にジョブチェンジしようと思って

いる。

名も無き異世界では8年ほど旅を続け、その後とある無人島に城を作って研究などをして30年ほど過ごしていた。

その間、ディーネやクラウス以外に、様々な魔物や異端といわれて捨てられた孤児達を拾っては自分の家族にしていた。

しかし、20年程無人島で暮らしていると、七国が駆真の住む島に攻めて来、また、いろんな理由で島を離れていた家族も勇者を名乗る一行に討伐されていってしまった。

七国が攻めてきた理由はこの島に眠る資源に気づいてしまった為。そして30年後、ついにこの島にやってきた勇者一行によってディーネと魔剣士となったクラウスも殺されてしまった。

勇者が攻めてきた理由が、駆真の存在が世界を脅かすだとか、世界を破滅させるためだとか。

城で勇者一行と対峙した駆真は、これまでの真実を話してから戦闘。少し遊んだ後、飽きて『崩天』の能力「刃群」を使って殲滅。それから城を家族の墓標兼マーカーとし、その後に再び「刃群」を使って七国の首都を滅ぼした。

サブキャラ紹介

海龍・ディーネ

水藍の国の首都近海で眠っていた海龍。

首都『ミツハノ』では水神として崇められるほどである。

龍の姿は、東洋の龍にヒレが付いて滑らかになったような姿で、人型になれば深い紺色の髪 of 女性となり、出るところ出て引つ込むところは引つ込んでいる、所謂ボンツキユツボンツな体系の美人さん。しかし口調は爺言葉である。

駆真に倒され、以降ずっと行動を共にしており、体の関係もある。しかし、種族の関係で子供が出来にくく、最後まで子孫が出来ることは無かった。

勇者一行の進行を阻止すべく、駆真の静止をも振り切って飛び出し、

無人島付近の海で戦ったものの、最後は口の中に飛び込んできた勇者に内側から脳を突き刺されて死んでしまった。
だが、魂は駆真と共にある。

アーマルシア・クラウス

月光の国の首都にあるアマキリ騎士団の元副団長。
中性的なイケメンだが、性別は女。

名前も相まってよく男に見間違えられ、騎士団内外でファンクラブ
が出来るほどであるが、性別は女である。

属性を込めることで様々な効果を発揮する魔法剣の使い手で、自身
の力で副団長の座まで上り詰める程の実力者。

しかし、駆真と出会い、一目惚れしてしまった為、駆真に負けた翌
日には騎士団を脱退して駆真を追っていた。

一人称が僕である「僕ッ娘」。

胸はDぐらいある。

駆真の旅が終わったときに魔剣「ヴァーニデル」を渡され、それ
と契約することで不老の魔剣士となった。

以降、30年間研鑽を続けていたが、魔剣とはま反対の能力を持つ
聖剣をもつ勇者に魔剣を折られ、心臓を突かれて殺されてしまった。
しかし、魂は駆真と共にある。

マクロスF フェイズ1（前書き）

今回は遅かった上に短いですが、すいません。

マクロスF フェイズ1

《回廊》で出来た穴に飛び込んだ俺は、前と同じように『流れ』の中で体の無い意識体となつて漂つていた。

ここでやることは一つ、次の世界を決めるためのある程度の絞りど、知識の吸収、能力を取り込む、能力の強化などだ。

何故強化するかというと、俺が使うACも無限に使えるわけでもなく、RPGで言うところのMPやSPに該当する物がある。

それは寝たら回復する物の、強くなつたとしても上限は一定のところで止まってしまう為、こうして次の世界へ行くときに能力の強化をしなければならぬということだ。

さて、強化やらなんやらも終わつたことだし、次の世界まで流されますか。

ステータス更新

AC1v・1↓1v・2UP!

AC登録数が15↓20に増えました!

名も無き世界の魔法を全取得しました!

武器を五つ作成しました!

武器開発技術1v・1↓1v・5UP!

駆真に魂が二人憑いた!

機械系統(全ANUBISシリーズ、全Rシリーズ、ドライアスバースト、全アーマードコアシリーズ等)の知識を取得しました!

物質変換1v・2(わかりやすく言うなら、鉄をマブラブのG元素や、ガンダリウムなどに物質を変化させられる)が可能となりました!

以上

……何だ？今は。

まあおそらく強化した物の表記かなんかだろう。

おっと、そんな事を思っているうちに出口が見えてきたな。

次の世界は、宇宙が舞台の世界だといいいんだが……

駆真がそう思うも束の間、出口が光ったかと思うと次の瞬間には駆真の体が空へと放り出されていた。

空から見える景色は、地上には近未来的な街が並び、上には画面に映されたと宇宙空間が見えていた。

「ツブねえ！！」

そう叫びながら《隠密》と《飛翔》を展開、姿を隠して近くの森に飛び込む。

木々の枝を折りながらも着地すると、切った部分に《治癒^{ヒール}》を展開して傷の修復を始めた。

「いたたた……いったいここはどこだ？

といつても、大体は予想付くんだが……。」

傷の治療が完了し、立ち上がって森の外へと出てみる。

数分歩いて出てきたところは、何かは分からない塔がある高台だった。

そこからは街全体が見渡せて、景色が綺麗である。

「あー……、なるほど。

ここはマクロスの世界か。

で、時代が2052年か……。」

とすると、所謂原作開始の7年前ってところか。

この世界がどのマクロスFなのかは判らないが、まあいい。
とりあえず、衣食住の確保が出来るように手を回さないとな。

「んじゃあ早速……。」

と、地面に手を当て、A Cを発動させて直接A Cの一つを刻みつける。

刻んでいる内容はA C《シンクロ同調》の円環に表示されている文字で、これを消えないところに直接刻むことでこの世界の情報を書き換えて俺という存在に違和感を無くさせるという作業だ。

「っし、準備完了。

んじゃ、《同調》。」

準備を終えて発動、展開する。

すると、一瞬だけ地面に刻んだ円環が光り、正常に発動したことがわかった。

今回俺が仕込んだ設定は、18歳の皇木駆真は一週間後にS・M・Sに所属することが決まっているパイロットの一人で、それと同時にL・A・Iの方にも所属することとなっている。

家族は他の船団にいる為、いまでは判らない。
というものだ。

ありきたりそうではあるが、一番使いやすい設定であつたりする。

それにあわせて、現在の姿を21歳時の姿から18歳時の姿へと変えている。

「これでよし、と。

んじゃ、早速家探してもするのでしょうかね。」

そついいながら駆真は服を普通の物に着替えた後、《金庫》の金を

この世界の金に換金しながら街へと向かったのだった。

街に出てみると、元の世界で見たことの無いような物から見たことのあるものまで、様々なものが売られていた。

「はあゝ……こりゃあ、すごいな。」

流石はフロンティアと言った所か。」

途中で見つけた自販機でジュースを一つ買って飲みながら感想をこぼす。

タバコを啜っていたい心境ではあるが、人ごみの中ということもあって自重していた。

ちなみにだが、今の駆真の姿は普通の人と変わらない格好で、上は黒シャツに白いジャケット、下は黒のスラックスと黒のショートブーツといった服装である。

しかも、身長が高いということもあってその格好が凄く様になっていた。

手には買い物袋を持っており、今し方ショッピングモールから帰っているところであった。

「これから過ごす住居も決まったことだし、必要な物は追々買い足していくからいいとして。」

とりあえず、今日は早めに帰るとするか。」

今の時刻は既に20時。

駆真は、即日入居可能で自分の希望に沿った部屋を出来るだけ探し回ったことで今日一日を使い果たしたのであった。

この世界にきた時の時間がほぼ10時で、今の時間も含めると約十時間動いていたことになる。

まあ、その間に昼飯を食べたり、観光したり、新しい携帯を手に入

れたりと色々していたが。

「しかし、これはご都合主義というもののかねえ……。」

というのも、何とか見つけた部屋がオズマ・リーとランカ・リーの住むアパートの隣だったのだ。

二時間前に部屋へと向かう途中で買った洗剤を渡して挨拶も済ませている。

その時にオズマとランカの両方が出てきたが、オズマはシブメンでランカはまあ、ちよつと大人びた小学生としか言いようが無かった。あと、オズマにもしかすると子守を頼むかもしれないが、その時はよろしく頼むと言われてしまった。

まだ20歳なのに（本当は自分の方が年上だが）しっかり男としか言いようが無かった。

そんなこんなの一日目だったが、特に何事も無く進めれたのでよかった、まる。

マクロスF フェイズ2

翌日。

昨日に買ってきておいた朝食用のパンと牛乳を食べ終わった駆真はスクラップ置き場へと来ていた。

ここに来た理由は簡単。

とある物を作る材料を集める為だ。

そのとある物とはずばり、乗り物である。

それもマルチプラットなものを、だ。

というのも、前の世界でもそうだが、移動手段が徒歩とか、体力や金を使う以外の何物でのなかった。

それを思い出し、『流れ』の中で手に入れた知識も使っているんな意味で最高の乗り物を作ろうと思ったわけだ。

そんな訳で、スクラップ置き場に來たわけだが……

正に宝の山である。

本来なら勝手に持つていくことは犯罪になるのであるが、俺は《隠密》を展開している上に、このスクラップは死ぬまで借りていくだけだから問題ないと思いたい。

（廃棄物を持つていくのも犯罪です。）

で、色々と持つて帰つてきたわけだが。

「うん、見事にごちゃごちゃしたもののばっかだな、おい。」

そこに積まれているのは鉄やそれ以外の材質のガラクタ。

しかし、そんなことは関係ないとばかりに《鍊金》を展開してガラクタを一つの塊と化させ、それに《変換》を使つて全く違う材質へと変化させる。

さらにそれをもう一度《鍊金》を展開して部品ごとに避けていった。そこからは、部品を完璧に組み立てるだけの簡単な作業。

休憩も入れつつ、五時間ほどかけてバイクの形が作りあがった。

ただ、俺が作る物だから唯のバイクな訳が無かった。

まず、エンジンには適当に作った半永久機関を。

ボディには余っていたオリハルコンと黒竜の素材を。

フレームはアルミ缶くらい軽くて丈夫な物を。

燃料は水分なら何でもいい。

速度はリミッター時で平均200k/m、解除時はその約十倍の平均2000k/mも出すことが出来る。

見た目はFF? ADVENTのフェンリルと、hack/G.U.の蒸気バイク『狗王』を足して割ったような形。

陸は勿論、アタッチメント次第で海を走ったり潜ったり、空を飛ぶことも、宇宙を駆ける事も出来る。

ただし、その為の装備はまだ作っていないので不可能であるが。

それ以外にも、小型機関銃や垂直滑走ミサイルを積んだり、武器の収納場所を作ったり、補助AIを組み込んだり、シートを自由に換えられるようにしたりと、色々と仕込んでいる。

それはともかくとして、出来上がった廃スペックなお手製バイクに跨り、試運転の為に街に繰り出した。

流石に200k/mも出すのは拙いからと高速で70k/m程の速度で走っている。

バイクのマップには、この先はコンサートホールがあると表示されていた。

そこまで来ると、Uターンしてまた自分の家へと向かう。

この結果に満足した俺は、このバイクに『スレイプニル』の名と八本脚の馬の紋様を刻み込んだ後、ボディに黒ベースに紅のラインの塗装を施してやった。

「これからよろしく頼むぜ、スレイプニル。」

そう呼びかけてやると、エンジンが震えて返事をしたような気がし

た。

それから7年。

え、時間が経つのが早すぎる？

気にしたら負けだ。何に負けるかも気にするな。

とにかく7年が経った。

あれから俺は設定通りにS・M・SとL・A・Iに入り、色々やっていった。

S・M・Sでは独立部隊『ガラム小队』の隊長となった。

TACネームは『サイファー』。

相方はジェシカ・ブラン。

……そう、ミハエルの姉だ。

S・M・Sに入隊してから2年と9ヶ月経った頃。

軍でVFでの誤射……フレンドリーファイアをしたスナイパーがいて軍法会議にかけられているとの情報を聞いた俺は、その情報をすぐさま調べて人を探しだし、この人、ジェシカを見つけた。

なんでも、不倫関係にあった人を誤射してしまったということもあって精神的に結構参っていた状態だったのだろう、マジで自殺する一歩手前だったから危なかった。

自殺を未遂で終わらせ、何とか説得出来た俺はS・M・Sに来ないかと誘ってみたところ、一度死のうとした身だから構わないとの返事を受け、説教してから相方となってもらった。

ちなみに、彼女のTACネームは『pixy』。

俺さんがもろにエスコンZEROのファンだったのだから仕方ない。(作者もエスコンバットファンだから仕方ない。)

なお、ミハエルには悪いとは思ったが、失踪したということにして貰った。

その証拠に、常時顔には仮面をもらっている。

あと、原作主人公であるアルトの母親、早乙女美与を助けてみた。

ジエシカを助けるより前の話で、L・A・Iにも同時に所属していた俺さん。

当時はまだVF-25が作られていなかったのでさっさと作ってみたところ、俺のおかげで更なる機体が作れそうだということで自分の研究開発チームを貰えた。

普通の人たちなら良かったのだが、残念なことに俺さんの下に集まったのはどれもいつも一癖、二癖もある奴ばかりで、しかも重度のオタクだった。

だが反面、腕は確かで、俺が指示した以上の結果を出してくれるから助かる。

そんな俺達のチーム名は『レイレナード』。

うちのチームが作る物はどれも見た目がいい割に威力や値段が良いと評判である。

今の目標は小型人型汎用兵器と、オービタルフレームOFを作ることだ。

小型人型汎用兵器はともかく、OFに関しては現在鋭意製作中である。

研究員の皆がAI萌え属性を持っていて助かった。

そんな俺らだが、別に兵器だけを作っているわけではなく、他にも薬品や新しい素材の開発といったことにも取り組んでいる。

その中でも俺はあらゆる状態から回復する万能薬『エリクシール』を作っており、その最新版試作品が

完成したときだ。

いろんな場面でそこそ有名になっていた俺は、とある病院に呼び出されて向かっていた。

足は勿論スレイプニルだ。

この時には既にヘルメットのスピーカーで話したりすることが出来るくらいにまでAIが進化していた。

それは置いといて、だ。

病院に呼び出された俺は、呼び出した張本人である院長の元に向かった。

そしたらそこには、早乙女嵐蔵……主人公であるアルトの父親がいたのだ。

何事かと院長に話を聞いてみると、何でも妻、早乙女美与が病で危ないらしく、何とかして助けて欲しいと言われたらしい。

だが、今の技術では早乙女美与の病気は治せないとのことだ。

そこで白羽の矢が立ったのが俺さん。

この間、ポロツと『エリクシール』について零してしまったのが災いしたらしい。

早乙女嵐蔵が俺を呼べと言った為、俺さんが呼ばれたということだった。

「で、早乙女さん。

この『エリクシール』、使うのは構いませんが、どうなっても知りませんよ？

もしかすると効かないで失敗に終わるかもしれませんが、もしかすると成功するかもしれない。

正直言つてこれは賭けです。

それでも使う覚悟があたりで？」

「当たり前だ。

他にどうしようもないとしても、可能性が一厘でもあるのなら私はそこに賭けるつもりだ。

それに、なにより……。」

「何より？」

「なにより……分の悪い賭けは嫌いじゃない。」

その言葉と共にやり、と笑う早乙女嵐蔵。

もうね、超渋い漢という雰囲気かひしひしと伝わってきたよ。

そんなことはどうでも良くて。

後日早乙女家に行き、早乙女美与に早速『エリクシール』を飲ませ

てみると、薬の影響で苦しみ始めてしまった。

が、それも一日経つと収まり、翌日様子を見てみると完全復活を遂げた早乙女美与の姿がそこにあった。

ただ復活はしたものの、『エリクシール』に対しての抗体が出来て、再び服用しても薬の効果がでない体にはなってしまったが。

アルト母を助けたその日は、早乙女一門総出での宴会となった。

その時に11歳となったアルトにあったが、男とは思えないほどに可愛かったから驚いてしまった。

流石は学園で姫と呼ばれるだけのことはある。

そして、レオン三島ことキノコだが、事故に見せかけて殺しておいた。

犯人は勿論俺じゃなく、たまたまその近くにいただけのトラック運転手。

無味無臭の睡眠薬を仕込んだコーヒーを飲ませてレオン三島に突っ込ませるだけの簡単なお仕事だった。

そんなこんなで色々としていた俺は今、小型人型汎用兵器の最終調整段階を行っていた。

流石のオタク研究員といえども、こういう時ばかりは真剣な表情でいる。

「……っし、エネルギーライン正常作動確認、永久機関『ウロボロス』の正常作動確認、よし。

では、これより小型人型汎用兵器『KOS-MOS』の起動を行う
！」

と言った後に「ポチッとな。」といって起動操作ボタンのエンターを押す。

すると、研究室の中央に配置された調整槽の蓋が開き、中にいる機

械で出来た少女の姿が見えてきた。

中の少女は、見た目は16・7歳くらいの女の子。

全体的に白い衣装で身を包まれており、額にはセンサー類を纏めて組み込んだバイザーが装備されている。

やがて中の少女の目が開き、身体を起こして俺のほうを向くと、

「おはようございます、マスター。」

と言ってきたのだった。

「ついよつしやあああああ!!」

「「「オオオオオオオオ!!!!」」」

KOS・MOSが起動したことで雄叫びを上げる研究チーム一同。
その日、とある場所から男たちの叫び声が聞こえてきたという。

マクロスF フェイズ2（後書き）

ついにKOS・MOS登場。

本来ならマリアの魂が入っているが今回は……。

それと、とうとう原作ブレイク的なことをしでかしてしまいました。

何かご意見があれば感想版にでもどうぞ。

マクロスF フェイズ3（前書き）

今回は説明回です。

ごちゃごちゃしてて見づらいかもしれませんが、勘弁してください。

マクロスF フェイズ3

さて、色々としでかした俺だが、少々面倒なこととなってしまうた。L・A・Iで変態（褒め言葉）どもと共にユニークな物や、超高火力な武装を作ったりとしているうちに、軍の開発部の連中に目を付けられてしまったらしく、呼び出しを食らってしまった。

だがそんな物に行きたがる訳も無く、ブツチさせて貰ったが。

再呼び出しをくらった時はシルバーホーク（初期）をVFに手直した物の途中図を送りつけてやろうと思う。

そんな俺が奴らと新しく作っている物がある。

それが何かというと、OF『オーバーフロームアヌビス』だ。

主材料であるメタトロンは、何故か資材保管庫の奥底に大量にあったのを全部貰ってきた。

原作である『ANUBIS Z・O・E』では、メタトロンによる精神汚染があったが、そんなものの俺には関係なかった。

武装も全て忠実に再現したり、それ以外にも双子の機体OF『ジェフティ』が使っていた全サブウェポンも大容量倉庫的なベクターラップに組み込んでおいた。

器となる機体自身の作成は既に終わり、俺が今現在作っているのは、システムの根幹ともいえるAIの作成だ。

サポートAIである独立戦闘支援ユニット『デルファイDELFHIE』なのだ
が、これが思ったよりも難しい。

システムのあらゆるパターンや、戦闘に適した武器の提案など、思いつく限りのものを詰め込んだほか、思考の進化が可能となるように作ってみた。

そして何とか完成したそれを『アヌビス』の胸部にあるAIユニットに入れて調整後、コクピットに乗り込み、起動させてみた。

機体の回りを研究員達が囲み、見守っている中、ついに『アヌビス』が起動し、

『おはようございます。』

私は独立戦闘支援ユニット『DELPHI』です。』

「「「「「うおおおおおおお！！！！！」」」」」

AIの正常起動も完了したのだった。

『アヌビス』やらLEV『ビッグバイパー』やらを作ったり、KOS-MOSの教育をしたり、オズマに変わって面倒を見たりしているうちにあつという間に時間が過ぎ、いつの間にか原作開始である2059年となつてしまっていた。

いまではランカもすっかり成長して中学三年生となっており、オズマのシスコンぶりも目に見えて酷い物だった。

たとえば、俺がこの世界に来て一年ほど経ったときの話だ。

その日、俺がオズマたちの家に遊びに行つて三人で過ごしていると用事が出来たのか、オズマが少し家を空けることとなつてしまった。仕方が無いからと、俺がランカの面倒を見ていると、突然それは言われてしまった。

「駆真さんのこと、駆真お兄ちゃんって呼んでいい？」

ってね。

その時俺は思つてしまったよ。

ああ、これならシスコンになつてしまつのも頷けてしまふよ、とな。それから、帰宅してきたオズマの前でも駆真お兄ちゃんと呼ばれてしまつてからは大変なことに。

いきなり銃を持ち出して俺を攻撃してくるわ、ランカが前に出てきて「そんなことするお兄ちゃんなんて大ッ嫌い！」と言つてしまつてオズマが崩れ落ちるわで、もうなんか力オスとしか言いようが無かつた。

その後は、その頃からオズマの彼女であったキャサリン・グラスを呼び出して魂の抜けかかっていたオズマの介抱を任せたり、散らかってしまった室内の後片付けをしたりと、面倒としか言いようが無かった。

以降、ランカは俺のことを駆真お兄ちゃんとよんでいる。

始めは恥ずかしかったが、今ではもう慣れた。

最近では、態々弁当を届けに来てくれたり、休日は共に過ごしたりしている以外は特に変わりは無い。

オズマは今でもキャサリンと仲良くしている。

フロンティア大統領府首席補佐官は知らない奴がなっていたが、キノコより全然マシだったからよしとする。

ああ、そういえば忘れていた。

俺、皇木駆真は何度も言うが不老不死だ。

故に姿が変わることは無いが、自身で変えることが出来る。

ので、ずっと18のままの姿だと流石に怪しまれると思い、ほんの少しずつではあるが姿を元の姿に戻しておいた。

だから今の姿は21、2歳くらいの姿となっている。

なに、特に不振がられることは無い。

既にL・A・Iでは老化抑制の手術が可能となっていて、それを受けたただけ言っておけばよかったから。

まあ、そんなこんなで遂に原作開始の日、シェリル・ノーム来訪の日となった。

この日、警護として何名かのSPの他に、S・M・Sからも2名だすこととなっていた。

ちなみに、その二人は俺自身が鍛え上げたとある部隊の出だったりする。

また言い忘れていた。

S・M・Sに所属して早8年。

始めは中尉だった俺さんが昇進して中佐になり、俺の部隊『ガル

ム小隊』に新たに二名、『ケイ・ナガセ』と『ハンス・グリム』が加わった。

ケイは階級は少尉、コールサインが『エッジ』で、グリムは階級は同じく少尉、コールサインが『アーチャー』だ。

ただし、グリムは何故か全員から名前で呼ばれている。

え、おもいつきりあの二人じゃないかって？

俺に言うな、世界の意思に文句を言え。

まあ、とにかく。

その両名を加えての小隊となった。

ジェシカだが、彼女も階級が上がっており、少尉から准佐に昇進している。

このあいだいい人が出来たとか。

それはいい、が、原作通りS・M・Sにミハエルがいるからこれからはより正体がばれない様にと厳命しておいた。

あと、とある部隊だが、S・M・S所属隠密機動特殊部隊『ファントム』という名で、全力で生き抜いて情報を持ち帰ること、護衛のときは全力で対象を守り、生き抜くことを信条としている。

殺し屋時代の知り合いに教えてもらった鍛え方で鍛えたら全員が全員、それはもう見事なNINJAとなっていた。

ただ、少しでも早く動きたいからって布面積の少ない服を着るのは任務のときだけにして欲しいと思う。

普段から男女共にそうなのだから恐ろしい。

閑話休題

話が逸れたな、続けよう。

で、シエリルのコンサート当日。

今日にバジュラが来ると判っていた俺は、S・M・S格納庫にて自身のVFの調整を行っていた。

ランカと一緒にコンサートに行こう？と誘われたが、非常に心苦しいが断った。

そんな俺の愛機だが、『アヌビス』を人前に晒す訳にもいかないということで、L・A・Iと俺達『レイレナード』が共同開発した最新鋭機、『RVFX-666 シグマ』を使わせてもらっている。

この機体の特徴は、主翼が前身翼になっていることと、エンジンが4基、そしてなにより『α（アルファ）ドライブ』と補助AI『雪風』の存在だと思う。

『αドライブ』とは、発動すると出力が3倍になるというシステムだ。

これにより機動力、防御力が格段に上昇し、何者にも追いつけなくなるほどの速さを得ることが出来る。

ただ、発動にも限界があり、制限時間がたったの1時間しかないということだ。

しかし、それを差し引いても寧ろプラスだからいい。

というか、VF版トランザムである。

それと、もう一つの特徴である補助AI『雪風』だが、これは『DELPHI』の劣化版だと考えてくれてもいい。

音声認識が可能で、ディスプレイに言語を表示しての意思疎通が可能な他、自動でのシステムの最適化、搭乗者を守るための強制的な操縦権の剥奪などが出来る。

この機体はテスト機体としての意味合いも強く、現在、俺達『ガラム小隊』とオズマ率いる『スカル小隊』にしか渡されていない。

ルカにこのことを話すと泣いて喜ばれた。

主武装は、

軽量型レールガン×1

ビームガンポッド×1

回転頭ビーム機銃×2

多弾頭マイクロミサイルポッド×2

ピンポイントバリア

PPBナイフ×2

などで、これに追加で俺は、

ソードビット×4

ガンビット×4
を装備している。

ソードビットは00クアンタのを、ガンビットはアルケーのファン
グに似た物を作った。

スカル小隊では、オズマはこれにミサイルポッドを増設したり、ル
カは高性能円形レドームを装備したり、ミハエルはスナイパーライ
フルをレールガンと交換したりしていた。

うちの小隊はジェシカがミハエルと同じくスナイパーライフルを、
ケイは小型円形レドームとガンポッドの増設を、グリムはPPBの
出力を上げていた。
ちなみにだが、俺の機体はツインアイでガンダム的な顔になってい
る。

再び閑話休題

とまあ、調整も終わり、一息つこうと一服していたときだった。

「あー……やっと調整が終わった。

しかし、今日があのでシェリル・ノームのコンサートライブの日か……。

全く、ミハエルもルカもエア・アクロバットのせいでコンサートが見れるとは、羨ましい限りだぜ……。」

そう言いながらタバコを一服。

嬉しい事に俺が吸っていた銘柄のタバコがフロンティア内でも売られていたので、100カートンも纏め買いしてしまった。

その時だ、警報が鳴り出したのは。

「大統領府よりS・M・Sに出動要請。全小隊スクランブル。
ミッションコード、ビクター？」

繰り返す、ビクター？が発令された」

「おいおい、マジかよ！
マジできやがった。」

急いで火を消し、すぐさま着替えてコクピットに乗り込む。

視線を動かすと、他の機体にも少し遅れてジェシカやグリムらも乗り込んでいた。

「んじゃ、ガルム小队出撃するぞ！！」
『『『了解！！』』』

返事と共に機体を動かし、カタパルトデッキへと移動させる。
そこから宇宙^{ソラ}へと通じる昇降口を登り、リニアカタパルトが作動される。

「システムオールグリーン、絶好調だ。」

『リニアカタパルト、スタンバイ。』

タイミングをそちらに渡します。

御武運を。」

「オーケー。」

サイファー、出る！！」

その掛け声と共に広く、黒い、無限の宇宙^{ソラ}へと飛び出した。
ここから漸く、原作との時軸が重なったのだった。

マクロスF フェイズ4（前書き）

後書きに簡単なキャラ状況を書いておきました。

マクロスF フェイズ4

「弾け飛べ!!」

ガンポッドを連射してヴァジュラの群れを打ち砕く。

今はまだ、ヴァジュラには現存する武器に耐性が出来ていないから
三代代前（VF-21）でも十分に殲滅することが出来る。
わかりやすく説明するなら、がガンダム。
最新型武装の威力がVガンダム位の差だ。

「各員、typeセイバー!」

『『了解!!!!』』』

俺の指示によって部下が散開する。

グリムが先頭を走ってガンポッドを乱射して牽制、ケイがその一つ
後ろでレールガンを撃ち込み、ジェシカが一番後方から取りこぼし
を確実に撃ち落としていく。

俺はというと、単独で遊撃している。

『スカルリーダーよりサイファー!』

そつちに何体か向かった!

よろしく頼む!』

「了解!」

と、付近のヴァジュラを片付けているとオズマからの連絡が。
それを聞いて向きを変えると、確かに俺達ガラム小隊のいるこつち
にヴァジュラの小隊規模の群れが飛んできていた。

「次、typeアサシン!」

『『『了解!!!』』』

号令と共に、各自フォーメーションを変え始める。

まず、全機がステルスモードに移行し、肉眼でも見えなくなり、ジエシカは近くの小惑星を足場にしてライフルを構え、グリムはレーザガン、ケイはガンポッドを構えた。

俺はガンポッド片手に、あえて姿を現してヴァジュラの前に出てきていた。

理由は一つ。

俺自身が囷をするためである。

「へいへへえい!!」

さあこいよ!!」

前方からウネウネと動きながら向かってくるヴァジュラを前にし、挑発しながら後退する。

その時にある程度弾をばら撒いて牽制する事を忘れない。

「3...2...1...いまだ!」

ズガガガガッ!!!

合図と共にケイとグリムの持つ武器から弾が吐き出され、瞬く間にヴァジュラ群を蜂の巣にした。

しかし一匹だけ、ヴァジュラ（小）が逃走しようとしていたが、それもジエシカによる狙撃で撃ち落されたのだった。

「っし。」

ケイ、周りに敵は?」

『.....居ないようです。』

「了解。

こちら、ガラム小隊のサイファー。

そっちはどうだ？」

『こちらスカルリーダー。』

こっちも殲滅した。

ただ……。」

「どうした？」

『スカル4……ヘンリーが死んだ。』

「マジかよ……。」

わかった。

とりあえず、帰ってから話すとするか。」

そついい、通信を切った。

「しかし、マジでヘンリー死んじまったのかよ……。」

まあ、死亡フラグ立ててたし、当然っちゃあ当然なの……か？」

実際、結婚してから少しウザくなったヘンリーだが、出撃前に

「俺、この戦闘が終わったら妻と一緒に高級レストランに行くんですよ。」

なんて笑いながら言っていたのだ。

それが今考えれば、死亡フラグだったのだろぅと思えた。

「無茶しやがって……。」

そう呟いた以降、基地に戻るまで俺は一言も話すことは無かった。

基地に戻り、死因等を聞こうと思ったが、どうやら隊員の誰かが直

接見たわけじゃないらしく、生体反応が消失したのと、死体のみ見つけたからだという。
で、後日。

その死に際を見届けた奴がいるから連れて来たと聞き、格納庫に向かうと、髪の高い女のような男に何かを言っているところだった。

「オズマの奴、何してんだ？」

「連れて来たんだってさ、ヘンリーの最後を見届けた奴を。」

近くにいた奴に聞いてみても俺が思ったこととほぼ同じことであつた。

「ふーん……つて、アルト？」

「えっ……アルトオ！？」

「え、ええ！？」

誰かに気づき、驚きの声を上げるスカル小隊所属のミハエルとルカ。

「な、ルカ、ミハエル！？」

それに駆真さんも……」

自分の学友に気づき、驚きの声を上げる早乙女アルト。

「ミッションコード ビクター

繰り返す。コード ビクターを発令する

全小隊スクランブル」

しかし、それも束の間。

ビクター……ヴァジュラが来たことを知らせる警報が鳴り出した。

「スカル小隊は出撃準備！」

「ガラム小隊も、すぐさま準備だ！」

『『了解！！！！』』』

「ギリアムの弔い合戦だ！」

行くぞおおおお！！」

掛け声と共に隊員たちはすぐさまパイロットスーツを着込み、コクピットに乗り込んでシステムを立ち上げる。

ふと視線をアルトに向けてみると、丁度オズマに殴られているところであった。

「ノリでぼざいてんじゃねえ、ガキが！！

おい、誰かこいつを安全区域まで放り出せ！！」

それだけを言い放つと、一瞥してその場を立ち去るオズマ。

アルトは悔しそうにしていたが仕方が無く、少し手の空いた人員に何処かに連れて行かれてしまった。

「さて、と。

とつとと殲滅するのでしょうかね。」

そう呟きながら発進し、宇宙^{ソラ}へと飛び上がった。

飛んだ先にはバジュラ群の小隊が2つほどだけ飛んでいただけで、それ以外には敵はいない様だった。

「よつし、お前ら。

typeライダーだ！」

「『了解！！！！』』」

隊員に指示を出し、俺自身も加速して接敵、ガンポッドを連射する。それだけでヴァジュラが撃ち抜かれ、瞬く間に爆発した。他の隊員たちは、高速機動でのヒット＆アウェイによる戦法で数を徐々に減らしていた。

それから十数分後、俺達ガラム小隊は誰一人として負傷してないが、オズマが交戦した時に破損して怪我をしたとの報告を受けた。また、たまたま近くにいたランカとシェリル、アルトの三人がその光景を見てしまい、さらにランカがあまりのショックで気絶してしまったとのことだ。

勿論、俺は帰還して報告を受けた後、次の日にお見舞いに行った。メインはランカ、オズマはおまけだ。

「大丈夫か!？」

「ランカ!！」

「あ……駆真お兄ちゃん。

お見舞いに来てくれたんだ……。」

「当たり前だろうが。」

俺の大事な妹分なんだから。」

「（妹分、か……。）

ありがとう、駆真お兄ちゃん。

でも、私はただショックで気絶しただけだから別に大丈夫だよ?」

「大丈夫っていう奴ほど大丈夫じゃないっての。」

まあそんなことより、林檎買ってきたんだけど、食べるか?」

「本当?」

「じゃあ、もらおっかな?」

「了解、ちよつとまってな。」

そう言っただけで包丁を持って作業に掛かること数分。お皿の上には兎型の林檎が綺麗に並べられていた。

「よし、どうよ。」

「やっぱり駆真お兄ちゃんの手先が器用だなあ……。」

「まあ、ね。」

それよりも、だ。

ほら、あーん。」

「えっ、アーンって、恥ずかしいよ……。」

と、俺はフォークに兎林檎を突き刺して口の前に差し出してやったが、それを恥ずかしいといって断るランカ。

「ええい、早く食べてくれ、ランカ。」

これしてる俺だって多少は恥ずかしいんだよ。」

「わ、わかった……アーン。」

観念してか、開けてくれた口に林檎を入れ、フォークを外した。

「どうだ？うまいか？」

「うん、美味しい。」

ありがとうね、駆真お兄ちゃん。」

「どういたしまして。」

さて、と。

その扉前に隠れてる奴、さっさと出て来い。」

林檎を食べさせ終わり、一息ついたところでさっきから覗き見してる奴に呼びかけた。

すると、ビクツと一瞬扉が揺れ、それから扉が開いて中にルカ、ミハエル、アルト、ナナセの4人が入ってきたのだった。

「えっ、ナナセさん!？」

それにアルト君たちも、どうして!？」

「どうして、って。」

「そりゃあ隊長のお見舞いに来たからだよ。」

「心配したんですよ？ランカさん。」

口々に声を掛ける覗いていた者達。

しかし、それも一通り言い終わると、今度は俺に矛先が向いてしまった。

「しかし、隊長の妹さんと駆真さんがそんなに仲がいいとは、ねえ？」

「以外でした、駆真さんがそんな人だっただなんて……。」

「はっ!？」

いや、ちよつと待て！

俺とランカ達とは8年前からの知り合いで、昔は時たま俺がランカの面倒を見てたって位だから！

「そんないい方しなくてもいいのに……。」

「え、なんか言った？」

「う、ううん！なんでもない！」

何か言っていたようだが、何を言っているのか解らなかった駆真であつた。

「んんっ!!」

で、お前達はここに来ているわけだけど、隊長にはもうお見舞い行つたのか？」

「ええ、もう済ませてきました。」

「あー……了解。」

じゃあ俺も行って来るから、お前らは自由にするといいわ。んじゃあな。」

そういい残すと、駆真は部屋を出てオズマの病室へと向かった。中に入ってみると、ベッドに横たわって窓の外の景色を見ているオズマがいた。

「よっ、オズマ。」

「お、駆真か。」

「お前もお見舞いか？」

「まあな。」

先にランカのほうに行って来た。」

「そうか……。」

で、先生はなんだって？」

「ランカは今日中には退院、オズマは後2、3日で退院できるとのことだ。」

傷が浅かったからこんなもんらしい。」

「そうか……。」

迷惑を掛けるな。」

「よせよ、気持ち悪い。」

「はははははっ、違うない。」

それじゃあ、悪いが少しの間だけ家のことを頼む。」

「了解。」

お前はさっさと怪我を治して帰ってきな。」

「そうさせてもらうとするよ。」

「おう。」

んじゃ、俺は帰るわ。」

「ああ、気をつけて帰るんだぞ？」

「解ってるっての。」

軽口を叩きながら話す二人。

実は、五年前くらいから互いに歳近いからタメ口で話そうというところになって以降、タメ口で話すようになっていた。

後日

オズマが無事復帰し、何時も通りランカを学校に送り出した後で二人してS・M・Sに行くと、アルトの入隊式的なのが今日行われることとなった。

といっても、アルト一人だったから簡易的なものだったが。

ちなみに、移動手段としてはオズマが車、俺がスレイプニル（バイク）だ。

「これでお前も隊員の一人か。

成長したもんだねえ……。」

「それは言わないで下さいよ、駆真さん。

それより、色々と噂は聞いてたけどまさかS・M・Sの隊員もしてるなんて驚きでした。」

「はっはっは、すげえだろ？

まあ俺のことはどうでもいいとして、だ。

お前、昨日追い出されたときに女と会ったみたいだけど、あれってシエリル・ノームだろ？

どうやって知り合ったんだよ。

いや、大体の予想は付いてるけどな。」

「なんで知ってるんですか!？」

いや、まあ、この間のコンサートのときにちょっと……。」

「ふうん。

どうせアルトのことだから、あの襲撃のときに文句言いに行ったり、シエリルの私品を持ってきてしまっただけで何かあったり、オズマが怪我した時の襲撃のときに避難した避難壕で一騒動あったとか、そんなんだろ？」

「いや、なんでそんなにピンポイントでわかるんだよ!!

てか、それ全部どこで知った!？」

「あ、やっぱり当たり前なんだ。

カマ掛けただけなのに。」

「なっ……！！」

「けっけっけっけ。」

母親が死なないで原作よりもかなりマシな性格のアルトでも弄られる事には代わりは無い、そんな日々なのであった。

マクロスF フェイズ4（後書き）

ごちゃごちゃしててすいません。
さて、今回の補足ですけど。

アルト……母親が死ななかったことによりそこまで父親とは仲が悪くは無いが、それでも空への憧れが強かった為、美空学園航宙科に進学。

原作通りヘンリーのVFを使って戦闘したり、避難壕でシェリルとハブニングがあったりしている。

ミハエル……殆ど原作通り。

ただ、姉が死んだのではなく、失踪したたかの違いである。
あと、駆真の仕業で克蘭可愛いよ克蘭状態ではあるが。

ルカ……殆ど原作通り。

だが、駆真の手により、身長が165cmぐらいまで伸びていたり、ズボンを短パンから半パンに変更していたり、駆真の弟子（技術士的な意味で）になっていたりする。

克蘭……一番変わっていない人。

ツンデレ要員。

ランカ……駆真お兄ちゃん大好きっ子。

原作開始の2年前くらいから、駆真と一緒にベッドで寝たり、弁当を態々届けに来てくれたりしている。

要はフラグですね、本当に自己満d（ry。

オズマ……一番駆真の影響を受けてるかもしれない人。

シブメン。

ランカが駆真にアプローチを仕掛ける毎に拳銃を乱射してくる危ない人になってしまった。

それ以外は良いオトコ。

キャサリンとは交際5年目。

そろそろ結婚しようか迷っているとかいないとか。

キャサリン……軍には入らず、S・M・Sに入ってきた。

オズマとラブラブで時々バカップル。

ジェシカ……自殺しかけていたところを駆真が阻止し、そのまま拉致って強制的にS・M・Sに入隊させられた。

当初は半鬱状態だったが、最近ではいい人を見つけたらしく、元気にやっている。

小隊ではスナイパー担当。

ケイ……某飛行機戦闘物のキャラとそっくりさん。

本人曰く、ケイ・ナガセの名は先祖の名を受け継いだからとのこと。小隊では索敵及び、弾幕担当。

グリム……そっくりさんその2。

こいつも先祖の名を受け継いだ。

ケイ・ナガセとは親経由の幼馴染らしい。

メイン盾担当。

キノコ（レオン・三島）……原作では主席補佐官で黒幕の一人だったけど、駆真に事故に見せかけて殺された哀れ（笑）な人。

大統領……駆真のオハナシによってちゃんと自分の頭で考えるようになった人。

前よりも市民に人気がある。

シェリル……殆ど原作通りだが、オズマが負傷したときの襲撃より後日に駆真に呼び出され（個人でなく会社が呼んだという形で）、V型感染症の原因である細菌を頭から小腸に移動させられたことにより、薬を飲まなくていいようになった。

なお、このことは極秘、または無かったこととなっており、 그레이スに知られていないし、監視カメラの無い手術室で行われたからばれることも無い。

그레이ス……変化なしで原作通り。

マクロスF フェイズ5

S・M・Sに無事入隊を果たし、訓練生となったアルト。

アルトの配属先がスカル小隊となったため、ミハエルやルカ達が面倒を見ることとなった。

その間、ランカから今度開催されるミス・マクロスフロンティアに出たいという旨を相談されたり、相変わらず変態技術者共と一緒にやってユニークなもの（某コブラの左腕の銃とか）を作ったり、KOS-MOSに教育を施したりと色々していた。

それから幾日経ったある日、アルトの演習日となった。

ただ、この日はミス・マクロスフロンティアの開催日でもあったのである。

「あー……暇だ。

暇すぎてここを壊したくなってきたんだが？」

「だ、駄目ですよ、皇木さん。

それに、そんなにせかしても時間は早く進まないんですから、大人しく待つときましようよ。」

「はいはい。」

と、俺の行動を阻止しているのは、松浦ナナセだ。

彼女とは病院で会ったときに紹介された。

曰く、ランカとも友達でよく遊ぶ仲らしい。

ナナセの隣にはアルトが学生服で一緒に見に来ていた。

「あ、もう始まるみたいですよ。」

ナナセの声に反応してステージの方に視線を向けると、スポットライトがステージ中央に向けられ、それ以外の照明が消え、ドラムロ

ールが鳴り出した。

『これより、第12回ミス・マクロスフロンティアを開催します！』

司会者の声と共に参加者のナンバーと名前が紹介されていく。その中には、全員統一された水着を着たランカの姿もあった。やがて全員の紹介が終わり、次に審査員の紹介が行われ始めた。その時、携帯に着信が。

内容を見てみると、

「1200から早乙女アルトの入隊テストである演習を行うけど、お前は特に関係ないからそのまま非番でいいよ。」
といった物だった。

アルトの方を見ると、同じように知らせが来たのか、携帯を見ている。

「ナナセ、すまん。

少し用事が出来たから抜ける。」

駆真さん、すいませんけど後で結果教えてください。」

「おう、わかった。

頑張ってクリアしてこい。」

「了解！」

小声で少し会話して、アルトが会場から出て行ってしまった。

「早乙女君、何の用事なんですか？」

「うん？それは秘密だ。」

そんなことより、アルトの分までしっかり見とこつぜ。」

「そ、それもそうですね！」

そういう訳で二人でミスフロを見ることにした。
ランカが出てきたとき、こちらをちらちら見ていたが恐らくアルトが居ないか見ていたのだろう。

その日の夜

『『『かんぱーい!!』『』『』』』

娘々にて、S・M・Sのメンバー全員で店を貸切にした常態でアルトの歓迎会&打ち上げが行われていた。

その中で、俺、アルト、ルカ、ミハエルの四人で一席に座っていた。

「おめでとうございます！これで学校でも会社でも一緒ですねっ！」

「たく、可愛げが無いぜ。」

ぬけぬけと入隊しやがって……。」

「よくいうだろ？」

運も実力の内、って。」

「あれだな。」

運が実力に伴った結果がこれだよ！ってやつだ。
けど、せめてなにか一捻り入れて欲しかったが。」

「貴様も今日から我々の一員だ！！
しっかり働けえ？少年！」

と、四人で話していると、俺の背後から幼い声が聞こえてきた。
振り向いてみるとそこには、

「なんだ、唯の幼女か。」

「なんでこんなところに子供が……？」

振り向くとそこには、青髪で長いツインテの一女子（幼女）と、

その後ろに赤髪のボーイッシュな女性が、桃色のウェーブがかった髪が特徴の長身の女性が立っていた。

「な、子供なんかではない!!
私はクラン・クラン大尉だ!」

(無い) 胸を張りながらそう自慢げに言う―クラン(幼女)。そこで前に向き直ると、ルカが小声でアルトに教えているところだった。

その光景を見ていた桃色髪の女性が少し目を光らしていたが、気の性だと思いたい。

「遺伝子が不器用なんだよ、な?クラン?」

「なんだと?」

私より背丈がちょっと伸びたからといい気になりよってええ!!
ミシエル!! 今日こそ成敗してくれる!!」

顔を赤くしながら怒鳴り、ミハエルに腕を振り回しながら襲い掛かるクランだが、それを指一本でとめられてしまう。
実にほえましい限りだ。」

「駆真主任、声に出てますよ?」

「おっと、これは失敬。」

アルトとはいえば、ミハエルとクランの戯れにあっけにとられ、ルカも必死で笑うのを堪えている。

まあ、あの夫婦漫才は見えていて飽きないし、ね?」

「だから声に出ていると……。」

「だがしかし、事実だろう?」

「「確かに。」」

「お客様。」

そこで店員に声を掛けられた。

「娘々名物、マクロ饅はいかがですか？」

「お、ランカじゃないか。」

店員の方を向くと、娘々の制服であるミニチャイナ服を着て、手に食べ物に乗っている皿を持ったランカが立っていた。

ちょうどその時、テレビで今回のミスマクロスの優勝者が出ていた。

「あー……その、残念だったな。」

「うっん、最初っから無茶だったの……。」

「でも、最後まで見てたけど、頑張ってたぜ？」

「そ、そうかな？」

「ああ、断言してやんよ。」

「ありがとう！ 駆真お兄ちゃん！」

そんな感じで励ましたりして周りを見てみると、周りにいた筈の奴らがこの席から離れてこつちをみていて、クランと追いかけていたミハエルがランカに（わざと）ぶつかって倒れ込んで来たり、その光景を見ていたオズマが拳銃を抜き放って追い掛けてきたから逃げ回ったりすることになってしまった。

「ええい、シスコンモードのオズマは化け物かー！」

「かあああるまあああー！！」

ブツchiiー！！」

「ヒヤッハーーーー逃げろぜ逃げろぜええー！！」

宴会ということもあっていつもの三倍以上の騒がしさではあったが、そんな今日も悪くは無いと、そう思う俺であった。

マクロスF フェイズ5（後書き）

て訳で、今回は歓迎会でした。
指摘、アドバイス等は感想によろしくお願いします。

マクロスF フェイズ6（前書き）

今回はちよいと難産でした。

マクロスF フェイズ6

あの宴会の日以降、特にこれといったイベントも無く日々が過ぎていった。

強いて言うならば、大統領がヴァジユラの存在を市民に公表したお陰でS・M・Sに所属している俺達が軍人扱いとなってしまった位か。

そんなある日、出撃命令が下された。

なんでも、ギャラクシーの生き残りをヴァジユラの大群付きで発見したとのことだ。

それを救出、及び迎撃するためにアルト待ちのスカル小隊と、俺達ガラム小隊が待機していた。

そこに遅れてパイロットスーツを着たアルトが走ってきた。

「遅いぞアルト!」

「遅いぞリア充!!」

「すいません!!」

そして皇木中佐、それは酷いです!」

アルトがなにか文句を言いながら起動させているが知ったことではない。

イケメンでリア充しているアルトが悪いのだ。

（駆真は自身が結構なイケメンでランカに異性として好かれていることに気づいていない。

リア充していることも、勿論気づいていない。）

「スカル小隊、スタンバイ完了。」

「ガラム小隊、同じく完了だ。」

『了解しました、オズマ少佐、皇木中佐。』

コールすると、ディスプレイにS・M・Sの制服を着たキャサリン・グラス大尉が応答した。

「キャシー、今回もしつかり生き返ってくる。」

『……私語は慎んでください。』

でも、無事に帰ってきてね?」

「解ってる。」

「……………イチャつくのは後にして欲しいんだけど?」

「おっと、すまん。」

「ごめんなさい。」

では、間もなく本艦はフォールドを行いますので各員備えてください。」

イチャイチャもほどほどに、連絡が入る。

それから間もなくして各小隊を搭載したマクロス・クォーターは戦闘宙域へとフォールドした。

戦闘宙域では既に戦闘……というよりはヴァジユラによる蹂躪が始まっており、ギャラクシーの戦艦『カイトス』が今にも堕ちそうになっている。

『全艦及び各機、戦闘準備。』

「さて、と。」

全員、一つだけ言うておく。

皆、生きて帰って来い!!」

『『『了解!!』』』

そう命令したあと、順に左舷飛行甲板に移動する。

『リニアカタパルト、スタンバイ。』
「ガラム小隊サイファー、出撃する！」

その掛け声と共に機体を急加速させて宇宙へと飛び出した。
それから少し遅れてガラム小隊の各員が追いついてきた。
スカル小隊は既に先に行っている。

『スカルリーダーより各機へ。』

今回は、俺達は軍の露払いだ。

ついでにヴァジュラのデータ収集もある。』

「サイファーより各機へ。」

だが露払いと言っても、無理してやる必要は無いから程ほどに動けばいい。」

『まあ、そういうことだ。』

『こちらスカル3。』

カロンシステム、良好。

しかし……このカロンシステム凄いよお！！

流石師匠の作ったシステム！！』

俺が作ったフォールドに頼らない新型通信システム『カロン』に興奮したのか、いつの間にかルカが御大將化していた。

頼むからヴァジュラに捕まったりした時に「オッ、ノーレ！！」とか言わないで欲しい。

ちよつとした説明だが新型通信システム『カロン』は、量子通信を用いており、3機の通信中継用ゴーストを介しての光速通信システムだ。

中継を使っているからか、機体間の通信ラグが殆ど無く、またECM対策を施してあるため、ヴァジュラのECM攻撃が効く事は無い。無人戦闘機はAIF-7Fをベースに、ECM攻撃無効化処理した上で、通信中継以外に情報収集や戦闘支援などにも使えるようにし

た。

そのせいで元よりも一回り大きくなってしまったが、性能は高いので問題ない。

「え………、まあいい。

んじゃあ、ガルム小队。

typeバーサーカー、だ。」

『『了解。』』』

命令と共に全員がちりじりになっていく。

typeバーサーカー、全員全武装のリミッターを解除しての全力全壊の攻撃を行うフォーメーションだ。

文字が違う？いや、合ってるよ。

サーチ&デストロイ（見敵必殺）を容赦なく行っただから。

「行けよ、フアングー！」

言うと共にソードビットとガンビットを射出、自律機動で動かし、自身はガトリングポッドを持って掃射する。

ガンビットとソードビットはというと、ガンビットは青いビームを放ち、ソードビットは緑の刀身を展開して貫いて次々とヴァジラを落としていった。

「たくつ。

切りがねえなあ、おい。」

そう言いながらもガウォークからファイターへと移行して高速でヴァジラを追い掛け回し、撃ち落していく。

実際、今ので大小あわせて70近くを潰してはいるが、それでもあまり減ったようには感じなかった。

そんな時、オープンチャンネルで通信が入った。

『ラビット1、迎撃開始!!』

死にたくない奴は私の視界から去れ!!』

『ラビット1……ケーニツヒモンスターか!!』

少し探してみると、丁度自分の方向に砲身を向けているケーニツヒモンスターを見つけた。

「つて、うおっほおおお!!」

かかっとなんぞらあ!!」

俺はすぐさまエンジンと追加ブースターのスロットルを引き上げて今いる宙域から脱出した。

その直後だ。

改造されたケーニツヒモンスターの8門の砲口からグレネード弾が高速で射出され、ヴァジュラの固まっていた宙域に到達した途端、凄まじい爆発が起こった。

その爆発の余波は機体を激しく揺らし、通信システムに障害を引き起こしてしまう。

「うえーはっはっはっは!!」

危なすぎて笑いしか出てこなかったぜ!？」

『いや、すまない。』

駆真なら避けられると思っていたからあまり気にしなかった。』

すぐにケーニツヒモンスターの操縦者であるカナリアに文句を言ったが、軽く返されてしまった。

「まあいいけどよ……」。

それはともかくとして、だ。

そろそろギャラクシーの戦艦が宙域から脱出できそうだとかいって
たし、俺らも一旦クォーターに戻るとするか。

サイファーより各機へ。

これより一旦補給のために帰還するぞ。」

『了解。』『』『』

全員殆ど撃ちつばなしに近い状態だったからか、弾薬が殆ど尽きて
しまっていた為、最速で帰還することにした。

補給を受けて再出撃した俺達は、またtypeバーサーカーで攻撃
していた。

そんな時、巨大なデフォールド反応が突如として出現、その中から
出てきた鰐の口とヒレを合わせたようなヴァジュラが出てきた。

そのヴァジュラは出現と同時に口を開いてそこから艦塞砲クラスの
巨大なビームを放ち、ギャラクシーの戦艦『カイトス』にぶち当て
た。

その威力は凄まじく、直撃した戦艦は腹を食い千切られて爆散して
しまった。

「うわぁ……。」

あまりの威力に一瞬呆けてしまう。

しかも、その間にも砲撃と同時に現れたヴァジュラの援軍が。

軍はというと、突然の新型に戸惑い、ヴァジュラの援軍に蹂躪され
ていた。

しかし、その中に突っ込んでいく一機がいた。

スカル3こと、ルカだ。

中継機を一体伴って向かっていったが、中継機……『ペテロ』が撃
墜され、ルカもデータ収集が出来たとほぼ同時にヴァジュラ（大）

に捕まり、戦艦へと連れ去られてしまった。

その時、連れ去られたル力を追いかけて突っ込んでいく機体がいた。

「あんの馬鹿が……!!」

見てみると、アルトの乗るVFだった。

俺はそれを追いかけることにした。

『うおおおお!!』

「レッツ、パアアアアライイイ!!」

『アルト!?それに中佐も!?』

『やめろ!!』

駆真はともかく、お前じゃ無理だ!!』

しかし、オズマの静止を聞かずに突き進む俺とアルト。

マイクロミサイルを打ち出して弾幕を形成し、ガトリングポッドを連射しながらフルスロットルで突入する。

そこにヴァジユラ（小）が何体が迫ってきたが、変形しながら排除した。

突っ込んでいく間、ミハエルとジェシカ、カナリアらが援護してくれた。

そんな時、あと少しというところまできた俺達に戦艦から多数の誘導ミサイルが。

それをアルトはスーパーパックをパージして回避し、俺は残りのMミサイルを射出して打ち落としてアルトが突っ込んだ穴にレールガンを撃ち込んで再び穴を開けて突入した。

戦艦の中……そこは存外に広く、バトロイドになっても十分に歩けるほどの広さがあった。

その中をPPBソードとガンポッドを構えて徒歩で進んでいく。

と、少し進んだところでアルトが物陰に隠れていたから通信を入れてみた。

「アルト。」

『皇木さん?! いつの間に……。』

「阿呆が、一人で突っ走りやがって。

フォローするこっちの身にもなれってんだ。」

『すいません……。』

でも、仲間が捕まってしまったから……。』

「知ってるつての。」

まあ、そんなことはどうでもいい。

それより優先なのはどうやってあいつを救助するか、だ。
見てみたところ、ここから先は一本道。

敵がいるかはわからんが、油断すんじゃないぞ。」

『りよ、了解!!!』

「オーケー。」

んじゃあ、面倒だが行くぞ。」

そういったところで通信を終了し、前に進んでいく。

道中ヴァジュラに出くわすかと思っただ、そんなことはなかった為、
ガウオークでササアと移動、反応がある地点まで辿り着いた。

覗いてみると、都合よく何も居らず、ル力機が鳶のようなものに絡
み付かれているだけだった。

「よし、アルト。」

行って来い。」

『わかった。』

それだけ言つとアルトが素早く機体に近づいてコクピットのハッチ
を開き、ル力を起こしていた。

その間に俺はセンサーを働かせて周囲を索敵し、何かいないかを探っていた。

「っし、アルト。

ル力はいけるな？」

「あ、はい。

気を失っていただけたようなんでこの薦さえ無くせば何時でも脱出できます。」

「わかった。

んじゃあ、ちよつとそこをどいてろ。」

俺の言葉を聞いたアルトラが退いたことを確認してPPBソードを一闪、薦を切り払い、VFを自由の身にしてやった。

「ミッション完了、んじゃ脱出すんぞ。

もうすぐクォーターが近接格闘を行うとのことだから、急げ！！」

「えっ、マジかよ！？」

それを聞いてアルトはすぐさま自分の機体を起動させて何時でも脱出できるようにした。

それとほぼ同時に戦艦の口が開き、その目の前に人型となったマクロスクォーターが。

「スカル3、4、サイファー、応答して！！」

「マクロス！？」

「向かいに飛べ、お三方あ！！」

その通信を聞いて三機はクォーターの反対側に逃げ込む。

VF-27は見つけたものの、すぐに逃げられてしまった。

脱出を確認したクォーターは既にチャージの完了した魔クロスキヤ

ノンを構え、戦艦の口に砲口を突っ込ませて思い切りぶちかました。貫かれた戦艦は擦れに擦れ、膨張した瞬間に爆発して消滅してしまった。

「あー……疲れた……。」

『たくつ、無茶しやがって。』

『隊長？あとでオハナシさせて頂きますからね？』

『ちよつ、ケイ。』

マジで洒落にならないくらい怖いから！！』

『あら、グリム。』

私のどこが怖いというのかしら？』

『あとでたっぷり絞ってやる。』

だがしかし………よくやった、アルト。』

『……………はい！！』

こうして今回の迎撃戦は終わった。

ちなみにこの後、魔王と化したジェシカとケイに俺はO H A N A S H Iされてしまったのは言うまでもない。

しかも、ランカにまで心配をかけて泣きかけられてしまっただけで危なかったというのも追記しておこう。

マクロスF フェイズ7（前書き）

約2週間ぶりですねえ。

いやはや。

バイトが9連勤だったり、オリジナルを色々入れたもんだからかなりの難産でしたよ。

まあ、次はちゃんと1週間以内には出したいと思うわけなんですというのが今の心境ですってね。

マクロスF フェイズ7

さて、あの迎撃戦から数日が過ぎた。

その間、ミハエルとアルトが喧嘩したり、美星学園にシエリルが転入したという話があったり、ランカが映画に出たりと、まあ、色々………そう、色々あったんだ。

ランカと一緒にスタントとして出たからと、そのことでみんなにネタにされるわ、ブチ切れしたオズマが完全武装して襲い掛かって来たりされたのだよ……。

そういえば、クランからどうすればミハエルと仲を縮められるかと恋愛相談されたりもした。

ただ、俺自身はそこまで恋愛したことがないから大したアドバイスはできなかったが。

それと、マクロススクォーターのオペレーター三人娘のラムさん（カタツムリの髪飾りの娘だ）に何度かアプローチをかけてみたが、悲しいことに中々上手くいかなかった。

後、俺の階級が中佐から大佐に昇格した。

主に今回の功績と今までの開発分も含めてとのことらしい。

次に、片手間で開発したミドルレンジ対応新型パック、『インパルスパック』の評価が思ったよりも高く、軍でも試験的に配備されることとなった。

そのおかげで開発した『レイレナード』にかなりの資金が回ってきたから大いに潤うことが出来た。

その『レイレナード』だが、いつの間にか『A A L I E Y A H^{アリーヤ}』を作っていた。

コジマ粒子を出さない新設計での設計図を作ってほって置いたのが悪かったらしい。

次に作るものだと思われて密やかに作られてしまった。

で、その起動実験にと呼ばれて起動させてみたところ、AMSの

代わりにEX-ギアでの操作方法を持ってきた。

ただ、精密動作にはやはり思考と脳からの電気信号による操作が必要だからと、頭にフォールドクォーツを利用したカチューシャのよ
うなものをつけることとなったが。

それにしてもこのアリーヤ、中々凄いものがある。

変形はできないものの、胸部付近に装備されたアンカーの射出による移動、各部ブースターでのクイックブースト、ほぼ直線でしか使えないが、爆発的な加速を得ることができるオーバード・ブースト。他にも、各パーツごとに変更できるなど、再現率と改造が半端なかった。

しかも、これで宇宙に出ても十分に戦えるものだというのだから、マッドどもの異常性が高いことがよくわかる。

ああ、あと。

自分が前々から製作していた武装の一つが完成した。

凍蛇『ウロボロス』、無限に伸縮するアンカーフックだ。

これはまあ、ハザマのアークエネミーを白くして蛇っぽく無くした物だと思ってくれてかまわない。

他にも、色々と細々した物を作ったりして日々をすごしていた。

そういえば、だが。

てきとうに作って出来上がってしまったBYDOバーガーを性犯罪者に食べさせてみたのだが、ナニモナカッタヨウダッタ。

その為か、二度と作るなという封印指定を受けてしまった。

そんなこんなでいつの間にかシェリルが慰安コンサートを行いにいく日を迎えた。

護衛にはアルトが着いて行った。

その間、駆真は自身の機体の調整とAIの教育を、ガルム小隊の面々は各々のしたいようにして過ごしている。

「いいか？敵が道具……ようはアイテムだな。」

エフティの背中のユニットと殆ど見た目が同じで、違っているのは色が黒ベースに赤いラインが走っていることくらいで、光の粒子のようなものを放出しながら飛べる再現率はかなり高かった。

それはともかく

閑話休題

ほぼ全速力で会場に飛んだ甲斐もあつてか、何とか開始10分前には到着することができた俺はチケットに書かれた席に向かうことができた。

「ふう〜………なんとか時間内に来る事が出来たからよかったものの、次からは気をつけよう………」

そんなことを呟いて誓っているうちに開始時刻となつたのか、ライブが始まつた。

その様子を一番良く見える席『S席』にてその様子を見てみると、何故か、今までのランカの成長が走馬灯のように思い返せられた。

それから数時間のライブの後、今回のライブの成功を称えようと楽屋に行ってみた。

え、どうやって入ることが出来たのかって？

ツーショットの写真とランカの義兄あにだといったら入れてくれたよ。

それで、丁度着替えが終わつたのかランカが楽屋の中から出てきた。

「あつ、お兄ちゃん!!」

「おう、ランカ。」

今回のライブ頑張つたな、偉いぞ。」

そういつて近づいてきたランカを撫でり。

「え、えへへ……そう?」

「ああ、まさかお前ここまで有名になるとは思いもしなかった。」

「それは社長さんのおかげだよ。」

「私は出来ることを頑張っただけだから。」

「それでも、こんな大きなライブをちゃんと成功させられたのはお前の頑張りがもあってこそだ。」

「知ってるか?ランカ。」

「お前、巷じゃ『超時空歌姫ランカ・リ・』なんて言われてんだぜ?」

「そんな、照れるな……。」

「まあ、いいじゃねえか。」

「それで、だ。」

今日のライブ成功祝いに高級なところに連れて行ってやろうと思うんだが、どうだ?」

「本当!」

「あ、でも私、今日はライブ成功の打ち上げが……。」

「あー……それなら仕方ないな。」

「じゃあ、また後日ってことで。」

「うん!!」

「それじゃあね、お兄ちゃん!!」

「ああ、楽しんで来い。」

そういつて送り出した俺。

「さて、と。」

そこに隠れてるやつ出て来いよ。」

「ありゃ、ばれてましたか。」

「それで隠れてたつもりなら、俺は帰るぜ?」

「あああ、待ってください!!」

と、慌てて出てきたのはサングラスと帽子を付けた男だった。

「お前は確か、ランカの言ってた社長さん……だったか？」

「あ、はい。」

私、こういうものです。」

言いながら渡された名刺には『エルモ・クリダニク』と書かれていた。

「これはご丁寧に。」

こちらも、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

そいつって俺も名刺を渡す。

「えーと、何々？」

『S・M・S所属『ガルム小隊』隊長 階級大佐兼『レイレナード』総合主任兼社長

皇木駆真』……つてええええええ！！??

た、大佐あ！？」

「おう、すげーだろ。」

「すごいなんてもんじゃありませんよ！！

レイレナードって、いまやL・A・Iから独立してホビーや化粧品、薬品、武器開発と多義に渡って手を伸ばし、全てにおいて成功を収めて急激に成長してる新興会社じゃないですか！

しかも、その社長！？」

「説明乙。」

ただ、補足するなら、トップについたのは推薦と多数決で決められたから、だけどな。

で、だ。

あんたはいったい何のようだ？」

「いえ、ランカさんのお兄さんの存在でルックス良しな皇木さんにランカさんとコンビを組んでもらおうかななんて考えてたんですけど、社長であるあなたさんにそんなことを頼むのは……ねえ？」
「そうだな…… コンビを組むのは無理だが、曲を提供するくらいのは出来るぞ？」

「えっ。」

「えっ。」

「なにそれ怖い。」

「……………」

「……………こほん。」

それはともかくとして。

一曲だけで、いいな？」

「え、ああ、はい、もちろんです。」

しかし、皇木さんって本当に何でもできるんですねえ。」

「なんでもじゃあ、ないさ。」

俺に出来ることをしているだけだ。」

「それは……………そうですね。」

それじゃあ、一曲だけ作ってもらえるということ、いいですか？」

「ああ。」

それと、ランカが有名になると変なファンとかが出てくると思うからこれを渡しておく。」

そういつて俺は背後から取り出すようにしながら《倉庫》を展開、中から一人の少女が入った棺桶を取り出した。

「えええええ！？」

ちよ、今どこから取り出したんですか？！」

「細かいことは気にするな。」

強いて言うならばレイレナードの社長クオリティってところだ。」

「は、はあ。」

で、この少女はなんなんですか？」

「こいつは『V-13』^{ニユー}。」

普段は普通の少女となんら変わらないが、戦闘時になれば戦闘モードに移行して全力で敵を排除してくれる、いわば小型人型汎用兵器『EVE』のバリエーションだな。」

「たしかEVEといえば、レイレナードが作り出したアンドロイドでしたよね？」

しかも一体で歩兵中隊を相手取ることが出来るスペックだとか……。

「

「おお、よく知ってるな。」

まあ、あんたの知つての通りこいつはアンドロイドだ。

でも、普段は本当に普通の少女と変わらないからそのつもりで接してやってくれ。」

優先行動はランカと社長さん以下を全力で守るようプログラムしてあるから。」

「わ、わかりました。」

……でも、どうしてここまでしてくださるんです？」

「義兄^{あに}が妹に何かしてやる、それだけのことだよ。」

「そうですか……。」

それじゃあ、私は帰りますんで。」

「ああ。」

曲やら何やらは後日ランカに持たせるとするから。」

「わかりました。」

では、お気をつけて。」

「そちらこそ、夜道に襲われることの無い様。」

そういつて俺は、ライブ会場を後にしたのであった。

後日

テレビを見ていると、ランカとミューがコンビを結成したという報道が朝のニュースに流れていた。

マクロスF フェイズ8（前書き）

約一ヶ月近く放置してました・・・orz

マクロスF フェイズ8

シェリルが慰安コンサートから帰ってきて早くも一週間が過ぎた。あつちで何があったのかはわからないが、どうもアルトとシェリルの間が余所余所しい。

それはともかくとして、あの社長さんとの会話が あった翌日にあら じめ書き出しておいた歌詞とそれに関する楽譜をランカに渡して おいた。

ミューと組んだのはさすがに予想外だが、特に問題がないと判断し た為においておくことにする。

あと、『レイレナード』の方で余裕が出来たこともあってS・M・ Sの大人メンバーと共に飲みに行ったりもした。

飲み始めてから30分後には酔って絡んできたオズマを捌いて その後をキャサリンに任せたり、泣き上戸だったジェシカを宥めたり、一杯目ですぐに酔ってしまったケイをグリムに任せたりと、色々 と面倒ごとが多かったりしたが、まあ楽しかったのでいいか。

そういえば、『レイレナード』のサーバーにハッキングしてきた奴 がいたから、そいつに大量のウイルスと迷惑サイトなど等を送りつけたり、逆ハッキングも掛けて誰であるかも特定しておいたから問題ない。

「さて、そろそろ来るのかな、っと。」

今までテストでしか使ってやってなかったアヌビスの前に立つ。

その姿は変わらないものの、どこか「不満だ」とでも言うような威 圧感がにじみ出ている。

「DELPHI、次の戦闘では使ってやるから不機嫌にならなくて くれよ?」

『不機嫌になど、なっていないません。』

『さて、本当かねえ……。』

まあそれより。

そろそろ奴さんやっこが来てもおかしくないと思うんだが、どうだろう？

『回答に困ります。』

『ですよねー。』

そういつた瞬間、格納庫全体に警報が鳴り響き、ヴァジュラが襲来してきたことを知らせ出した。

「えー……………」

作者の悪ふざけ

『これは、天の意思というものでしょうか？』

「知らんよ。」

そんなことより、早速お前を使う時がきたみたいだな。」

『そのようです。』

そついつつ俺はコクピットに乗り込んだ。

乗り込むと待機モードだった各部が動き出し、アヌビスが膝立ち状態から立ち上がり、地面から少し浮き上がる。

「んじゃまあ、いつちよ行きますかー!!」

『これより、戦闘行動を開始します。』

DELPHIのその言葉が発されると共に、背部翼状スラスタが稼動して宇宙へと飛び出した。

その一分後、フロンティア船団の前方に多数のフォールド反応が出現、出口の穴が開くと同時に中から数え切れない量のヴァジュラが這いずり出てきた。

その中には見たことの無い新種もいた。

その瞬間、砲口の先から太くて長い光の奔流が放たれ、ヴァジユラの大群を貫いた。

ヴァジユラ群は反応する間もなく奔流に飲み込まれ、跡形も無く消滅してしまった。

『ヴァジユラA群、消滅を確認しました。』

残りヴァジユラ群はB、C、Dの三群です。』

「了解。」

んじゃあ、面倒だけど蟲を蹴散らすとしますかね。

DELPHI、引き続きサポートは頼むぜ？」

「了解、ランナー。」

それと、先程から通信が掛かってきてますが、いかが致しますか？」

「軍ならこう送つとけ。」

『これから最大火力で戦闘するから邪魔にならないところで戦え』
つてな。

あと、俺達はB群攻めるからD群に行くようにつてのも伝えておいてくれ。」

『了解。』

「いい子だ。」

DELPHIの返答を聞くと、ゼロシフトを発動してB群の眼前に移動し、そのまま『ウアスロッド』を取り出して一番近かったヴァジユラを突き刺す。

突き刺したヴァジユラはその隣にいたヴァジユラにぶつけて自身は後方に少し後退、右方から放たれたビームを回避した。

さらに少し後退したアヌビスは前方にいるヴァジユラ群をマルチロツク後、ホーミング性の高い『ハウンドスピア』を射出して周りの敵を多く減らしていく。

それを4、5回つづけた後、武装をクラブからホーミングミサイル

に切り替えた。

「ミサイルパーティだ!!」

その掛け声と同時に限界射出数を射出し、チャージが完了と共にもう一度射出する。

これだけでヴァジュラB群の半分以上が消し飛んだのであった。

「ふむ……これでもまだ半分を超えた位か。

DELPHI、次は何かいいと思う？」

『では、次はサブウェポン：フランクスでの移動撃ちは如何ですか?』

「よし、それだな。」

『………そんな簡単に決めても宜しいので?』

「なに、DELPHIが選択したの物が一番効率よく敵を屠れる方法だった、ってただだ。」

『これが噂の《ツンデレ》、と言うものでしょうか。』

「ちよつ、そんなの誰から教わった?」

『この言葉はこの間ランナーが離れている時に来たルカから聞いた物です。』

「……………ルカ、後で締めてやる、徹底的にな。」

この言葉を駆真が呟いたとき、ルカは突然背筋が凍る感覚がしたとか。

ちなみに、こんな会話をしている合間にもヴァジュラは襲ってきて

いた為、駆真はアヌビスを操ってファランクスを使用してB群を殲滅していた。

「……………っし、この周辺の敵残存勢力は？」

『敵残存勢力、無し。』

お見事です、ランナー。』

「ふふん、天才ランナーとでも言ってくれ。」

『お見事です、天才ランナー。』

「……………やっぱりやめてくれ。」

あれから十数分後。

駆真は3個師団並みに居たヴァジュラ群を囲う様に動きつつ、ファランクスを撃ち続けてB群を片付け終えた。

それから他の区域を見てみたがどうも状況は一部を除いて芳しくなかった。

一部というのは、KOS・MOSとS・M・Sの各部隊が展開しているC群であり、軍はD群を相手にしていた。

しかし、S・M・Sはともかく、軍の殆どが練度が低く、一人五殺していれば良い方だった。

中には軽快に飛び回って次々と撃墜しているのも居たが、それでもほんの一部でしかない。

「はあ……仕方ない。」

DELPHI、軍を援護しに行くぞ。」

『S・M・Sの方は良いのですか？』

「あいつらなら大丈夫だろ。」

なんせ武器やら何やらは全部新型に換装させてるし、何より、第三

種兵装搭載済みのKOS・MOSがいるしな。

あと十分もすれば全滅させて帰還するさ。」

『なら、構いませんが。』

「よし。」

んじゃあ、ゼロシフトで移動後、ハウンドスピアを一回ばら撒いてからのHミサイルの乱れ撃ち一択で行くぜ。」

『了解、ランナー。』

ゼロシフト、レディ。』

それからもう、まさにアヌビス無双だった。

『ゲイザー』で動きを強制的に止めさせたヴァジュラ群に対して『戌笛』拡散ver.を放ったり、近づいてくるものにはウアスロッドで串刺しに、遠くに居る敵にはHミサイルをお見舞いしてやったりと、今まで居た軍は一体なんだったのかと言いたくなるくらいに次々と撃破していった。

それも軍の撤退も含めて約三十分ほどかけて行い、最後の軍の兵が撤退したのを見届けたとほぼ同時に戌笛収縮ver.を残っていたヴァジュラにお見舞いして終了した。

これによって原作で挟み撃ちにされたのが、駆真とS・M・Sの活躍によって成されないものとなった。

しかも、増援が来てからではあるが、ピクシー隊で唯一死んでしまったララミアも死ぬ前に補給に戻らせたため、死ぬことは無かった。

「ふう………これで終わりか？」

『大型デフォールド反応確認。敵増援、後方より来ます。』

「マジでかよ………。」

流石に面倒になってきた駆真。

だがそんな時にマクロスクォーターから連絡が入った。

『こちらデルター、サイファー聞こえますか？』

「こちらサイファー、良く聞こえてる。

それでどうした？」

『これより本艦は近接格闘モードに移行後、マクロスキャノン・改を敵増援に向けて発射します。

なので、今のうちに補給にお戻りください。』

「あー………了解。

んじゃあ、サイファーはこれより補給に戻る。」

『了解。

あなたの活躍は凄かったですよ。』

「サンキュ。」

と、指示に従って格納庫に入っていく。

モニターを見てみると、人型となったマクロスクォーターの構えるマクロスキャノンから発射された三条の光が極太の螺旋を描きながら敵の中心を抉り、更にそれを横に振ることで増援に來たヴァジュラ群は出て来て間もなく消し飛ばされてしまったのだった。

これによって襲い掛かってきたヴァジュラを殲滅し、尚且つアヌビスを大々的にアピールできた駆真であった。

マクロスF フェイズ9

あの撃退戦から早くも一週間が過ぎた。

あの撃退戦で使った機体は^{アヌビス}一体何なんだ、とレイレナードに抗議が沢山来ていた為、野外に設置した会場にアヌビスに乗って出現し、この機体は俺以外が乗って操作したら自爆するとか、この機体だけで船団を破壊することが可能だとか、この機体はワンオフ機体で、材料の関係上これ以上作れないだとか、当たり障りの無い部分に関して色々と公開した。

その後、俺はKOS-MOSの姉妹機を作ることを会議で決定した。会議に参加していた奴らもKOS-MOSの素晴らしさを知ってるからか、満場一致で賛成である。

そのKOS-MOSだが、あの撃退戦の後にE・S・ダイナのデータを見てみると、殆ど通常のレーザー弾幕しか使っておらず、エーテルはほぼ全く使っていなかった事がわかった。

後は回避効率と索敵効率が急激に上がっている位か。

まあ、とにかく。

今回の撃退戦は色んな意味でかなりの収穫があつたのは確かであった。

「失礼します。」

「お、入ってくれ。」

社長室で回想していると、社員の一人が部屋に来た。

「で、どうした？」

「はい。」

警備用EVE『パトリオット』と、ACネクスト『AALIEYAH』^{アリーヤ}とそれのパーツの量産体制が整いましたのでご報告に、と。」

警備用EVE『パトリオット』とは1.5m程の大きさの人型ロボットで、全体的にスマートなボディでありながら装甲は12.7×9mmの直撃を受けても多少へこむだけで、耐熱は4000度まで耐えることが出来る。

武装は大腿部格納スタンスティック×2、左腕部格納型グレネード2種（炸裂弾、閃光弾各5発）、右腕部格納型小型2連装マシンガン（各300発）、右肩部格納型ミサイル（2発）、左肩部可動シールドとなっている。

脚部にはローラーが、背中にはブースターが付いてあり、短時間の滑空、地上での高速走行などが可能となっていて、それ以外でも激しい行動が可能となっている。

稼働時間は、通常モードでなら最大3日間、フル戦闘モードでなら1日となっている。

^{ノーマル}通常型は単眼となっており、^{モノアイ}メインカラーが緑、指揮官機は赤になつて角が付いている。

^{ハイクラス}高性能型は単眼から二つ眼に変わり、^{ツインアイ}カラーもメインカラーは白、指揮官機が黒になり、索敵機能及び走行速度が強化され、装甲も小型ミサイルの直撃を受けても凹むだけで済む程の強度となっている。

「そうか。」

しかし、まさかアリーヤまで実用化されるとは思わなかったよ。ちなみにだが、どの位予約が入りだしてる？」

「はい。」

まずパトリオットですが、高性能型を主に政府や大企業といった大手が15組ずつ。

警備会社等が通常型を40組程予約されております。

ネクストに関しましては、政府が20、大企業が5、それ以外では軍やS・M・Sといった軍事関係が40ずつといった所です。

優先度としては政府、軍事関係、企業の順で回そうかと思っております。」

「そうか。

で、月産どの位で出せる？」

「パトリオットは高性能型が10、量産型が50程で、ネクストは5機ずつとなるとの事です。」

「わかった。

それじゃあ、後でこれを研究開発部の奴らに渡しといてくれ。」

と、そういつつ俺は鞆の中に展開した《倉庫》の中から一つのデータチップを取り出して社員に渡した。

「……………これは？」

「次の開発のための設計図。

あいつらなら渡せばすぐにわかると思うから。」

「設計図ですか……………設計図?!」

普通のことといった感じで渡すと何故か驚かれてしまった。

「何をそんなに驚いてるんだ？」

「いやいやいやいや、お言葉ですが社長。」

ただの一社員である私にこんな機密の詰まった物を、何でそんなに簡単に渡すんですか?!」「だって、一々持つてくの面倒なんだぜ?」

「私も持つて行くのが面倒ですよ!!」

それに、いきなりこれを奪われたらどうするんですか!?!」

「そこら辺は大丈夫だ。」

対策くらい万全にしてある。

それより、こんな所で無駄口を叩いてないでさっさと行った方が良いと思うんだが。」

「はあ……分かりましたよ。」

では失礼しました。」

そういつて、社員はなにか諦めた顔をしながら部屋から出て行った。

「ふむ……次は何を造ろうか。」

先ほど渡したデータチップの中身は、ACネクスト『LANCER』
と『HOGIRE』^{オーギル}の設計図だ。

本当はどちらか一つにしようと思っていたのだが、せっかくだからということで両方の設計図を詰めておいたのだった。

どちらも使い勝手が良く、若干機動力は低めではあるが、それ以外の能力がバランス良く取れているため初心者でも使えると言う機体である。

アセンブル次第では攻めも引きも遠距離攻撃も使えるという、まさに万能機だ。

「とりあえず、普及用の機体はOKだから、次は『サンシャイSUNSHINE』シリーズでも造るか？
いやでも、個人の趣味全開な武器も作ってみたいしな……………」

そんな思考の渦に陥る駆真。
だが、そこで一つの名案（？）を思い付いた。

「あ、そうだ。

片方ずつ作るのが面倒なら両方を同時に作っちゃえば良いじゃん！」

ということとで早速始めようとした時、部屋に白衣を着たルカが入ってきた。
手には何かの紙を数枚持っている。

「主任！」

「どうした、ルカ。

何か問題でも起こったか？」

「そうですね、確かに問題が起こっています。
それも社長限定で。」

「あれ、何かしたっけ？」

そう思うと思い切りため息を吐かれました。

「主任…………」。

勤務時間を見てみたんですが、どういうことですか。

S・M・Sとレイレナードこうちと合わせて、全く休んでないじゃ無いですか！」

「いや、ちゃんと休んでるぜ？」

「それも、午前か午後に半日休んでるだけじゃないですか。

それじゃあ休みじゃ無くて休憩って言ってますよ！」

「わかったわかった……。」

で、俺はどうしたらいい？」

「一週間程休んでください。」

こっちはもちろん、S・M・Sの方にも来ては駄目です。」

「なん……だと？」

じゃあ、俺に一体何をしろと。」

「ランカちゃんと遊びにでも行って来てやってください。」

彼女、『駆真お兄ちゃんが最近遊んでくれない』って言って寂しがつてましたよ？」

「……そうか、わかった。」

それじゃあ今日は早く帰らせてもらうとするよ。」

「ええ。」

しっかりと家族サービスしてあげてください。」

「そっちな、出来るだけ問題なく頑張ってくれよ？」

「判ってますよ。」

そう言われて、駆真は荷物の入ったカバンを手にとってレイレナードを出て行ったのだった。

マクロスF フェイズ10（前書き）

長いことお待たせして申し訳ありませんでしたああああ！！

マクロスF フェイズ10

「さて、どうしたものか……。」

家に帰った後。

ランカと今度の週末、遊園地に遊びに行くことが約束され、あつという間に日にちが過ぎて約束に日となった。

俺は遊園地の入り口付近にあったベンチに腰掛けてランカが来るのを待っている。

そんな俺の格好だが、いつものシャツにコートではなく、下は赤いラインが入ったスラックスタイプのズボンに、上はワンポイントが入った黒いタンクトップと袖が長めの白と黒で彩られた薄手のフーデ付きパーカーを。

頭には十字架と蛇の柄の入った黒い薄手のニット帽を被っており、胸元には細いチェーンで結ばれたドグタグが掛けられている。

腰には鎖に繋いだ財布と、小物が入った和風柄のポーチがぶら下がっていた。

肩には《倉庫》に繋げる為の小さい鞆を引っ掛けている。

「あと一時間もあるのか……。
本でも読むか。」

時間を確認した後、《倉庫》から小説を取り出した所で見知った人影が見えた。

それは人混みに揉まれながらもこちらに徐々にだが向かっていた。

「あー……、つたく。
仕方ないな。」

出した小説をまた《倉庫》に戻し、駆真は人混みに入って目的の人物に素早く近づいていく。

そして目の前に来たと同時に、その人の腕を取って待ち合わせ場所に引っ張って行くことにした。

「おい、大丈夫か？」

「わ、わ、た、助かりました。

ありがとうございます……って駆真お兄ちゃん！？」

助けてくれたのがまさか駆真だと思わなかったのか、面白いくらいに驚いているランカ。

そのランカはと言うと、裾の先にフリルの付いた白いワンピース、肩には薄い黒色のストールを羽織っており、頭には顔がばれないようにつばの広い白色の帽子を被って、首には緑色をした珠の嵌まつた小さな菱形のネックレスを、そして手には肩掛け紐の付いた鞆が握られていた。

「ああ、ランカのステキなお兄様だぜ。」

「な、なんでもうお兄ちゃんがここに？」

「そりゃ、待ち合わせしたんだから来てるに決まってんだろ。

にしても、見事に人の波に吞まれてたな。

大丈夫か？」

「う、うん……。」

でもおかげで助かったよ？」

「寧ろあれで俺も巻き込まれてたらアウトだよな。

まあ、そんなことは至極どうでもいいか。

んじゃ、いくか。」

「うん！」

その言葉と共に駆真とランカは共に目的地に向かって歩き始めた。

「遊園地『フロンティアパーク』」

歩いて電車を乗り継いで移動すること数十分。

目的地である遊園地に着いた。

道中にランカから聞いた話だが、ここは最近観光事業の一環で作られたテーマパークらしく、開園時間前から並んでも二、三時間待ちが普通らしい。

しかし、その分鉄板のアトラクションから斬新な新型アトラクションまで、あらゆる物が揃っており、その上パーク内の店舗価格も比較的良心的との事である。

そんな所の優先フリーパスを何枚も貰っている俺は少しおかしいとか。

仕方ないじゃない、一番金出したの俺の会社なんだから。

それはともかく。

「ランカよ、とりあえず何に乗りたい？」

「私は何でも良いけど、お兄ちゃんは？」

「俺か。」

「そうだな……じゃあ、これはどうだ？」

と、駆真は二人で持っているガイドマップの一カ所を指差した。その場所にあるのは、ジェットコースター。

「えーと、

『驚異の連続三十回転 リバースコースター』？」

「ああ。

ある程度坂を昇りきった後、垂直落下から始まり、連続四回の急力ーブ、逆さ状態での坂道を上下降、そこからスクリューしながら進

み、そして連続三十回転するって代物だ。」

「へ、へえ……。」

詳しいんだね？」

「だって、設定したの俺だからな。」

「……………納得出来ちゃった。」

ため息を吐きつつ、何故か納得出来てしまったランカ。

「マジで？」

まあ、流石にランカもいるし、これは無しだけだな。

そのかわり、始めてこともあるしコーヒーカップから行くか。」

「うん、行こつ、お兄ちゃん？」

「OK。」

そう言い、二人は手を繋いでコーヒーカップへと向かって行った。

コーヒーカップを乗り終わった二人はその後、メリーゴーランド、
空中ブランコ、お化け屋敷^{ルナティック}、何故かあったVFのシュミレーター等
を一通り回り、アトラクションの集合地帯から少し外れた場所にある
緑地帯で昼食を食べることにした。

「で、俺は何も用意して来てないけど、本当に大丈夫なのか？」

「うん、今回は私がお弁当を用意したかったの。」

そう言いながら、ランカは肩に掛けてある鞆から色々なものを取り
出しはじめた。

敷物から始まり、大きめのバスケット、水筒、取り分け用の皿や箸
などを、だ。

実はこの鞆、偶然暇を持て余した駆真がランカの為に作った鞆で、
中に小さい《倉庫》を入れてあり、又、防犯の為に、《隠密》、

《反射》、《無効》、《結界》の計五つのACを組み込んだ防御専用の術式武装としたのだ。

そうとは知らないランカはと言うと、大好きな駆真からの贈り物ということで、説明書と共にこれを喜んで受け取っていた。

「とりあえず色々作ってみただけど、どうかな？」

思案している内に用意し終えたのか、ランカが敷物の上で弁当を広げていた。

駆真も敷物に座り、広げられた品々を見てみると、から揚げやミニハンバーグと言った定番のおかずから、プチトマトやハムキュウリ、ハムチーズ、キンピラ牛蒡といった多種多様な品が四段重ねの重箱に詰められており、見た目だけで実に美味しそうだと思える。

「凄いな……」

これ、全部一人で？」

「うん、駆真お兄ちゃんに喜んでほしくて……」

「嬉しいことを言ってくれるじゃないか。」

でも、無理はしちゃ駄目だぜ？」

「む、無理なんかしてないよう！」

顔を反らして慌てて否定するものの、駆真に正面に向けられてしまう。

「……………うう。」

「やっぱり、か。」

ほら、隈が出来てるじゃねえか。」

「でもでも、お兄ちゃんに喜んでもらいたくて……」

「頑張ってくれたのは嬉しいけど、程々にしてくれよ？」

お前が倒れたら元も子も無いんだからな。」

「……………わかった。」

少しシユンとしながらも頷いたランカ。
それを見た駆真は顔から手を離し、手を合わせた。

「っし、これで説教は終わり。」

それじゃあこの後の為にも飯、食べようぜ！」

「……………うん！」

じゃあ……………」

「……………いただきます。」

そうして二人は箸を手にとり、メイドinランカの弁当を食べはじめたのだった。

二人で「はい、あーん。」なんて食べさせあうなんて事もしつつ、全部弁当を食べきった二人はまだ廻り切れていないアトラクションにも出来るだけ乗ってお土産も買い、時間的にもタイミング的にも最後のアトラクションへと向かっていた。

「しかし、もうこんな時間か……………」

早いもんだな。」

「本当だねえ。」

あつという間だったよ。」

「まあ、それだけ楽しめてたってことだから良いけどな。」

と、話していると順番が回ってきた。

最後のアトラクション、遊園地といえは大抵はある物、それは観覧車である。

二人して狭い室内で向かい合うように座り、窓から見える景色を眺

める。

人口的な空には夕日が映されており、その光はこのプラント全体を赤く照らしていた。

「たまにはこういうのも良いもん、だな……。」
「そう、だね……。」

縁に肘を掛けながら外を覗く駆真が何気なく呟いた一言に、軽く相槌をうつランカ。

その表情は夕陽のせいかな赤み掛かっており、体はモジモジとしていた。

「どうした？」

「う、うん、お兄ちゃん。」

あのね、私、話したい事があるの……。」

「……………ま、まさか、好きな男が出来たとかじゃないよな?!」

「ち、違うよぉ!!」

私、ずっと前から、駆真お兄ちゃんの事が……s……。」

ランカが何かを言い出そうとしたが、そんな時に限って駆真の携帯から着信音が鳴り響いた。

「悪い、ランカ。」

ちよつと出ていいか？」

「う、うん……。」

一言断りを入れて電話にでる。

表示された画面を見ると、相手はオズマだった。

「もしもし。」

皇木だが、何かあったのか？」

『出てくれたか！』

ヴァジユラの大群が攻めてきたからこつちに至急来てくれ！！』

「大群とか、マジかよ。」

そう言いつつチラリとランカの方に視線を向ける。

「駆真お兄ちゃん……行ってきても良いよ。」

「……………良いのか？」

「だって、お兄ちゃんが出ないと危ないんでしょう？
だったら、行って皆を守って欲しいな。」

「ランカ……………わかった。」

オズマ、先に出といてくれ。

俺も直ぐに向かう。」

『了解だ。』

それから……………なんでランカと一緒にいるのか、後でじっくり聞かせてもらうぞ？』

「え……………」

最後にドスの効いた声で脅しながらすぐさま電話を切られた。

相手するの面倒だなあ、と思いながらも駆真は携帯をポケットに仕舞い直し、ランカへと向き直る。

「そういう訳だからさ、ちよつくら行ってくる。」

「うん……………気をつけてね？」

「当たり前だ。」

俺を誰だと思っている？

ランカの兄であり、『レイレナード』の社長であり、なにより魔王と言われた男だ。

必ず帰ってくるさ。」

「そう……だよな。」

うん、じゃあ、いつてらっしゃい!!」

「ああ、行ってくる!」

覗き穴が空いただけの白い仮面を鞆經由で《倉庫》から取り出し、顔につけた駆真は観覧車の扉を開け、《飛翔》を発動した状態で身体能力にモノを言わせて飛び出した。

「必ず、絶対に帰ってきてよ、お兄ちゃん……。」

そして、ランカは飛び出した駆真の後ろ姿をみてそう呟いたのだった。

マクロスF フェイズ10（後書き）

どうでもいい話

先月の中頃、バイト先の一人に彼女が出来た。
これで独り身は俺一人……………。
オワタ………… orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7230r/>

異世界を渡るヒトの物語

2011年11月15日00時17分発行